十全同窓会会報 182

2022 / 10

目　次 | CONTENTS

十全同窓会理事長就任のご挨拶…02
就任挨拶……03
令和４年度十全同窓会総会開催…07
物故会員……08
総会記事……09
教授就任講演……12
受賞……16
学会報告等……19
御遺骨返還式・合同慰霊祭…21
論説……22
金沢から世界へ発信……23
十全学術行脚……24
支部だより……27
病院紹介……28
教室だより……30
金沢大学医学生と「生と死」を考える……32
ホームカミングデイ開催…34

十全同窓会理事長就任のご挨拶

十全同窓会理事長
中村　裕之
（昭和60年卒業）

十全同窓会理事長に就任
十全同窓会の発展のために

この度、土屋弘行理事長の後任として理事長職を拝命いたしました。会員の皆さまには日頃より医学類の学生支援や卒後研修などで大変お世話になっており、改めて感謝申し上げます。私は1985年に金沢大学医学部を卒業後、直ちに岡田晃教授（1993-1999年、金沢大学長）が主宰されました公衆衛生学教室に大学院医学研究科の大学院生として入学いたしました。修了後は、助手、講師、助教授を経まして、2003年4月より、高知医科大学の教授に転出しましたが、2007年1月に金沢大学医学部環境生態医学・公衆衛生学の教授としてお迎えいただきました。2008年からは6年間、当時中村信一学長（現 十全同窓会名誉会長）の学長補佐として金沢大学の発展に寄与させていただきました。なかでも中村学長のご指導のもと、2016年に金沢大学大学院先進予防医学研究科を千葉大学・長崎大学との共同大学院として設立いたしました。

2018年に金沢大学医薬保健研究域長・学域長に就任し、4年間務めましたが、金沢大学の総合大学としての融合性と、医薬保健研究域の独自性という、相反する理念の狭間で舵取りにもかなりの困難を経験いたしました。特に医薬保健学の教育には、国家試験合格という最低の責務があり、リベラルな大学教育の場にほど遠いことも多々あります。北陸の医療の拠点である大学病院を中心とする関連病院を有する伝統的な医学教育もその独自性の1つと言えます。この問題をあえてここで展開しましたのは、総合大学における同窓会組織の在り方に関係することからです。

地方の総合大学における医学部同窓会の存在価値が全国的に下がっていることは、多々指摘されているところです。新卒者入会の著しい低下、大学に残って活躍する新卒医師の減少から、地域医療を支えることができなくなるという危機的な状況は、全国的な傾向であります。成功例として挙げられる医学部同窓会は、医学部単科の大学あるいは関東の大学だけです。地方の総合大学の医学部同窓会は、大学全体の同窓会との関係においてもかなり苦心していると聞いております。幸い、本年の4月に医学部出身の和田隆志先生が学長に就任されました。和田先生が主導します産学官金連携によるオープンイノベーションと研究成果の社会実装化や国際的視野をもったイノベーティブなリーダー人材の育成などは、十全同窓会を含め医学系が中心となることによって、金沢大学の発展にも繋がることと考えます。つまりは十全同窓会の発展に際しては、今後は、大学全体をも視野に入れる必要があると考えております。

同窓会の存在価値に対する昨今の意見の中には、卒前、卒後のサービスの在り方に関することも、多々指摘されてはおります。十全同窓会会報をお届けするだけでは、当然、十分な情報発信や情報交換の場とはなりませんし、現役学生の課外活動の支援にも限界があるところです。幸い、絹谷清剛教授（十全同窓会会報編集委員長、医薬保健総合学研究科長）が中心となって医王保護者の会と連携し、金沢大学医学類、そして十全同窓会に対してより一層の愛着と誇りを持てる仕掛けを試みていただいております。AIやIoTあるいはSNSを用いて情報交換を促進する案も出されていますが、一方では、そのような人間関係を希薄化するような仮想空間は、かえって同窓会の理念と合致しないとの考え方もあります。同窓会の価値観からみても、土臭く、愛情と絆を共有することを元に、やはり金沢大学医学類（医学部、医薬保健総合研究科、先進予防医学研究科）の卒業生でよかったという母校愛を育成するには、教授、教員が今後、さらに一層、学類あるいは大学院学生に対する教育において地道な努力を続ける必要があると考えます。その点では、新しい技術的な方法も有効かもしれません。また各教室、医局や課外活動などの組織においては先輩・後輩の絆が強く、伝統的な同窓会の存在意義に適っていることも多く、大いに参考にし、十全同窓会の発展に繋げたいと考えます。

会員が誇りを持てる同窓会であり続けるように会員皆さまの温かいご支援を賜りながら、今後は、山本健十全同窓会会長（名誉教授）他、関係各位とともに、本会発展のためにできる限りの努力をいたす所存です。今後とも、ご指導、ご鞭撻のほど、何とぞよろしくお願い申し上げます。

就 任 挨 拶

金沢大学医薬保健研究域医学系消化器内科学教授に就任

山下　太郎　博士
（平成7年卒業）

理念を共有し、一丸となり社会に貢献できるよう努力

この度初代教授である金子周一先生の後任として、2022年9月1日より、消化器内科学教室を担当いたします山下太郎でございます。

消化器内科学教室は令和元年の金沢大学内科の臓器別再編に伴い発足し、130年超の歴史を持つ金沢大学第一内科の第18代教授、金子周一先生が初代教授を務められました。私が2代目を担当させていただくことになりますが、今後も教室員一同、高い専門性を持ちながら全人的な医療を提供する臨床、最先端の技術を用いたオリジナルな研究、切磋琢磨しながら常に自ら成長することができる教育、そして地域・国際貢献に全力で努めてまいりたいと思います。

消化器は大きく、食道、胃、十二指腸、小腸、大腸、肛門からなる消化管領域と、肝臓、胆嚢、胆管、膵臓からなる肝胆膵領域があり、人体最大の臓器群を形成しています。さらにこれらの臓器は血液や神経を介してお互いに、あるいは脳など消化器以外の臓器とシグナルを伝え合う臓器連関を行っています。消化器病の原因は幅広く、酸、感染症、内分泌代謝、血管、自己免疫、悪性腫瘍、精神的ストレスに至るまで多様な病因からなる複雑な病態を形成します。

診療では、1）全消化器領域の悪性腫瘍、2）慢性肝炎、肝硬変、3）炎症性腸疾患、4）急性膵炎、慢性膵炎、5）胆石胆嚢炎、胆管炎、6）感染症、7）酸関連疾患など、多くの疾患に対し、最先端の医療知識、技術を用いて、本邦をリードする消化器内科医療の提供を目指していきたいと思います。

教育では、消化器専門医である前に内科医であろう、のスローガンをもとに、ベッドサイドでの医療面接、身体診察を重視、専攻医一人一人が全人的な医療を提供することができるような教育体制をとっています。さらに最新、最高の消化器内視鏡技術、世界最先端の肝胆膵疾患の診断、治療を身に付けられる研修プログラムの充実を図っています。研修医、指導医、スタッフそれぞれが切磋琢磨し、自ら成長することができる教育研修の実践を行っていきたいと思います。

研究では、1）常に世界最先端の分子生物学的技術を駆使して疾病発症の分子基盤を解明し、臨床家の疑問、要望に応えることができる基礎研究、2）リアルワールドデータや探索的研究により、新たな診断治療法を臨床家に還元できる臨床研究、を行い、世界の消化器病学、肝臓病学をリードしていきたいと思います。

私たちの教室の理念は“消化器病学を極めよう。そして、患者、社会に貢献しよう”です。理念を共有する医局員が一丸となり、臨床、教育、研究を通じて、本邦はもとより世界中の患者、そして社会に貢献できるよう、引き続き努力して参りたいと思います。

◀診療内容紹介
研究内容紹介▶

金沢大学融合研究域融合科学系教授に就任

髙松　博幸　博士
（平成12年卒業）

ライフサイエンス分野の研究者・アントレプレナー育成を目指す

この度、令和4年4月1日付で、金沢大学融合研究域融合科学系教授に就任いたしました。

私は金沢大学医学部入学以前に、昭和63年に京都大学工学部化学工学科を卒業、平成2年に京都大学工学研究科化学工学専攻を修了し工学修士の学位を受けました。その後、帝人(株)にて生物製剤の開発研究に従事し、その研究を通じて、医学・生物学に強い興味をもち、平成12年本学医学部を卒業いたしました。直ちに内科学第三の大学院に入学し、中尾眞二前教授のご指導の下、再生不良性貧血における新規自己抗体の研究にて医学博士の学位を受けました。その後、血液内科学の臨床・研究・教育に取り組んでまいりました。

最近、米国スタートアップ企業との共同研究により、次世代シークエンサー（NGS）による微小残存病変（MRD）が検出されない多発性骨髄腫患者の一部は治癒にいたる可能性を示しました。また、安価にNGSと同レベルでMRDを評価できるマルチカラーフローサイトメトリー法をスペイン・サラマンカ大学で研修後本学に導入し、保険診療が可能なように改変いたしました（約2500件/年、実施）。また、新規医薬品の開発に繋がる「新規抗HLAモノクローナル抗体作製法の開発」も進め、特許査定されています。

令和3年度から現所属である融合科学系に移り、人工知能やデータサイエンスの理工学系専門家との共同研究・社会実装・起業家育成を進めています。また現在、本学血液内科学宮本敏浩教授のご指導の下、医学類学生・若手医師の教育も行っており、臨床実装につながる研究マインドをもった医師の育成も進めたく思っています。金沢大学十全同窓会の先生方には引き続きご指導、ご鞭撻を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

就 任 挨 拶

三輪　高喜　博士

（昭和63年度大学院修了）

伝統は作るもの

令和４年９月１日付けで、金沢医科大学副学長に再任されました。担当は研究、産学連携、国家試験対策であります。また、従来からの国際交流センター長、ダ

金沢医科大学副学長に再任

イバーシティ担当も兼務することとなり、一気に仕事が増え身の引き締まる思いであります。

本学は1972年に創立し、本年6月に50周年を迎えました。かつては新設医科大学と呼ばれていましたが、現在ではその言葉もなくなり、学生はもちろん卒業生である若手医師ですら知る人はいません。大学自体も卒業生が4,000名を超え、成熟期を迎えており、これからの50年に向けてさらなる発展を目指しているところであり、この職責は重大であると認識しています。これまでの歴史は変えられませんが、伝統は守るものではなく作るものであるというのが私の信条です。

本学がこれまでの50年間、常に掲げてきた建学の精神は、「人間性豊かな良医の育成」であり、これからも変わることはありません。そのためには時代の変化に即した方策を作り続ける必要があります。すべての学生を医師として送り出すことが必要ではありますが、単に医師になればよいというものではなく、良医となるための教育が不可欠です。幸い本学は医学部、看護学部合わせて学生数1,000名足らずの大学であり、学生と教員そして職員との距離が非常に近いというのが利点、特徴です。この特徴を活かし、先輩医師であるわれわれ教員が日頃から範として学生に背中を見せることを常に意識しています。

人口100万人の石川県に2校の医学部という環境にあり、今後も協調して相互の発展を目指していけることを祈念しております。十全同窓会の皆さまにもご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

川原　範夫　博士

（昭和58年卒業）

副院長職を継続しつつ、副学長として大学を盛り上げたい

2022年9月1日に金沢医科大学理事長の高島茂樹先生から副学長を拝命いたしました。任期は3年です。小生は金沢

金沢医科大学副学長に就任

大学名誉教授の富田勝郎のもとで脊椎脊髄外科を研鑽したのち、2010年4月に金沢医科大学整形外科に奉職いたしました。2013年9月から当時の勝田省吾学長のもとで学生部長を拝命し、4年間、学生の福利厚生、生活支援、学習支援などに携わりました。障害学生の合理的支援に関する規則、委員会を全国の私立医科大学に先駆けて制定したのもいい思い出です。2017年9月から当時の神田享勉学長のもとで医学部長を2期4年間勤めました。医学部長の任期中は教授会の司会、とりまとめを行うとともに当時の教務部長であった病理学教授の上田善道先生と協力して医学教育カリキュラムの改変に尽力いたしました。医学教育の国際基準では診療参加型臨床実習の時間を大幅に増やすことが求められています。そこで医学部5年生の4月から始めていた診療参加型の臨床実習を4年生の4月から始めることにしたわけです。

一方、小生は2021年10月から伊藤透病院長のもとで危機管理及び診療情報担当の副院長を務めております。今後、副院長職は継続したまま、宮澤克人学長のもとでの診療支援および学生の病院実習担当の副学長を兼任することになりました。これからは同じく副学長に就任した耳鼻咽喉科の三輪高喜教授、医学教育学の堀有行教授と共に宮澤学長を支え、金沢医科大学を盛り上げていきたく思っております。

十全同窓会の皆さまには診療、医学教育の両面にわたり、大変お世話になっております。改めて感謝申し上げます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

金沢医科大学医学部長に就任

岩渕　邦芳　博士
（昭和59年卒業）

実習のさらなる質向上に取り組む

令和4年9月1日に金沢医科大学髙島茂樹理事長から辞令を賜り、新学長宮澤克人教授の後任として医学部長に就任しました。私は、昭和59年の卒業後、金沢大学第３内科に入局し、当時の松田保教授にご指導をいただきました。昭和63年に学位を取得し、平成７年より金沢医科大学血液免疫内科に赴任しました。平成９年に金沢医科大学生化学Ⅰに移籍し、平成21年に伊達孝保教授の後任として生化学Ⅰ教授に就任しました。

金沢医科大学医学部は、「生命への畏敬－Reverentia Vitae」という当大学の理念に基づいて、建学の精神に掲げられた「倫理に徹した人間性豊かな良医の育成」を目指しています。知識や技術だけでなく思いやりの心を兼ね備えた臨床医を社会に送り出すことが当学部の役割です。

当学部では、令和3年度よりCBTを第3学年の年度末に行うこととしました。医学教育分野別評価（国際認証）で求められている診療参加型臨床実習の時間数を確保することが目的の一つですが、それ以上に、医学教育モデル・コア・カリキュラムで求められている「患者中心の視点」、「コミュニケーション能力」、「チーム医療の実践力」といった能力の修得には診療参加型臨床実習での教育が最も効果的であるとの判断がありました。学生には、先輩医師の姿を見ながら、「医の倫理」や「医師としての責務」等にも理解を深めてもらいたいと思います。同時に、診療参加型臨床実習を通して、医師国家試験に合格するための、「医学知識」「診療技能」も身につけなければなりません。実習のさらなる質向上に取り組んでいきたいと考えています。

これからもよろしくお願い申し上げます。

金沢医科大学医学教育学講座特任教授に就任

八木　邦公　博士
（平成2年卒業）

糖尿病・脂質異常症のゲノム診療と医学教育の統合

平成2年本学卒業の八木邦公と申します。この度、学校法人金沢医科大学医学教育学講座に特任教授として着任し、生活習慣病センターおよびゲノム医療センターにて糖尿病・脂質異常症・慢性心不全の診療および臨床研究をさせていただくこととなりました。

本学卒業後に竹田亮祐先生が主宰されます金沢大学第二内科に入局し、馬渕宏先生のご指導のもと平成6年に学位を取得しました。その後、金沢循環器病院にて竹越襄先生のご指導を受け、平成９年に第二内科に糖尿病研究室の責任者として戻りました。小泉順二先生のご指導を受け、山本博先生より“診療だけではなく視野を広げる機会を”とのお心遣いを受けて、平成15年から2年半ハーバード大学ジョスリン糖尿病センターに留学しました。留学中は糖尿病の血管合併症の成因である酸化ストレスに対する抗酸化因HO-1の誘導について谷内江昭宏先生のアドバイスをいただき検討を行いました。帰国復職後、心血管合併症を伴う糖尿病症例の診療および臨床研究に従事しておりました。その後平成29年、富山大学第一内科戸邉一之先生のお声掛けで移籍しました。富山では、糖尿病の心電図所見fQRSが拡張障害と関連することを示し、多数の貴重な脂質異常症も紹介していただきました。多田隼人先生に遺伝子解析をしていただき、遺伝子診療に携わり、漢方についての造詣を深めることもできました。

教育は、糖尿病診療で、行動変容を促す成人教育を稲垣美智子先生よりご指導いただき、平成26年、金沢大学医学教育センターに勤務し、診療科での医療面接や身体診察の指導の重要性を実感しておりました。

国立大学とは異なる環境に戸惑いながらですが、糖尿病・脂質異常症のゲノム診療と医学教育の統合を目指しますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

就 任 挨 拶

金沢医科大学脳神経内科学臨床教授に就任

濵口　　毅　博士
（平成10年卒業）

これまでの経験を活かして神経疾患の診療・研究、教育に全力を尽くしたい

令和4年4月1日付で、金沢医科大学脳神経内科学の臨床教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成10年に本学を卒業し、高守正治教授が主宰しておられた神経内科に入局しました。平成13年4月より大学院に入り、山田正仁教授の下でプリオン病、アルツハイマー病、脳アミロイドアンギオパチーなど、認知症の原因となる疾患の研究に従事しました。平成17年3月に大学院を修了し、平成21年4月から平成23年9月まではドイツのチュービンゲン大学でMathias Jucker教授の下でアルツハイマー病の脳病理変化の主な特徴である脳βアミロイドーシスの個体間伝播をテーマに研究を行いました。平成23年10月に帰国後も、Alzheimer病やプリオン病といった個体間伝播する可能性がある認知症性疾患について、臨床的あるいは基礎的な研究を進めてまいりました。

診療面では、金沢大学附属病院を中心に、富山市民病院、公立能登総合病院、石川県立中央病院といった急性期病院や金沢若松病院、医王病院といった神経変性疾患の終末期医療を行う病院など、性質の異なる病院での勤務により、幅広い神経疾患の診療を行わせていただきました。

この度、金沢大学脳神経内科学の小野賢二郎教授より強力なご支援をいただき、金沢医科大学脳神経内科学に赴任させていただきました。金沢医科大学では、これまでの経験を活かして神経疾患の診療・研究、医学生や若手医師の教育に全力を尽くしたいと考えています。金沢大学十全同窓会の皆さまには、引き続きご指導・ご鞭撻の程、何とぞよろしくお願い申し上げます。

東京薬科大学生命科学部ゲノム情報医科学教授に就任

細道　一善　博士
（特別会員）

ゲノム情報に基づく医療データサイエンティストの育成

この度、令和4年4月1日付けで東京薬科大学生命科学部ゲノム情報医科学研究室の教授を拝命いたしましたので、金沢大学医学部十全同窓会の皆さまに就任のご挨拶を申し上げます。私は平成27年2月1日より金沢大学医薬保健研究域医学系革新ゲノム情報学分野の准教授として田嶋敦教授のもと、研究と教育活動に従事してまいりました。最新のゲノム解析機器が完備され、先進的な解析手法が実践可能であることに加え、基礎系のみならず臨床系の先生方とも多くの共同研究の機会を得ることができ、歴史と伝統のある金沢大学で充実した7年2カ月を過ごせたことに心から感謝しております。これまでに金沢大学の多くの先生方から賜りました多大なるご指導、ご助言にこの場をお借りしまして御礼を申し上げます。

おかげをもちまして、東京薬科大学にてゲノム情報医科学研究室を立ち上げることとなりました。東京薬科大学は1880年創立の東京薬舗学校を前身とし、今年で142年の日本で最も長い歴史を持つ私立薬科大学です。私が所属するのは生命科学部の中の生命医科学科であり、医科学の知識と技術を持った人材育成を目指した学科になります。教授の半数以上は医師であり、医学部ではありませんが医療現場と連携した研究と教育を実践している大学です。その中で私はゲノム医科学分野におけるデータサイエンスを実践しています。医療・健康という分野は、データサイエンスの活用領域としては、とても重要性の高い領域であり、ビッグデータ、特にゲノム情報によって医療を発展させる、医療データサイエンティストの育成を進めていきたいと考えています。今後ともご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

令和4年度 十全同窓会総会開催

日時／令和4年7月2日（土）
場所／十全講堂

令和4年度の十全同窓会総会が、7月2日（土）午前9時より、十全講堂において開催された。

最初に山本健会長が開会の挨拶をされ、令和3年7月から令和4年6月までにご逝去連絡のあった物故会員（67名）に全員で黙祷を捧げた。

引き続き山本会長が議長を務め、議事に入った。まず、理事長の土屋より令和3年度の会務報告がなされた。令和3年3月の卒業生は111名であったこと、新型コロナウイルス感染拡大の影響により引き続き支部総会が見合わされたこと、現在会員総数（15,407人）などが報告された。また、十全同窓会名簿が6年ぶりに改訂され、会費免除会員の先生方、協賛企業より多大なるご協力を賜り、無事に発行されたことへの感謝の言葉があった。

次に、杉山和久医学系長・医学類長から、医学類の現状、システム生物学金子周一教授の退職、血液内科学の宮本敏浩教授、脳神経内科学の小野賢二郎教授、呼吸器内科学の矢野聖二教授の新任が報告された。絹谷清剛大学院医薬保健学総合研究科長より、大学院管理・運営体制、大学院教育、教育プログラムの現状、ポーランド ヤギェウォ大学とのシンポジウム（Web開催）が報告された。田嶋敦大学院先進予防医学研究科長より、大学院先進予防医学研究科大学院修了要件、教育プログラムなどが説明され、ドイツ・ハインリッヒハイネ大学（デュッセルドルフ大学）および構成大学間での第4回日独合同先進予防医学シンポジウム（Web開催［主催：長崎大学］）の開催が報告された。引き続き、第20回高安賞の贈呈が行われた。盛 金丹氏（腫瘍分子生物学）に最優秀論文賞、鎧高 健志氏（細胞移植学：血液内科学）、Ho Thuy Bich Tuyen氏（消化器内科学）には優秀論文賞が授与された。

参席された9支部代表（茨城：諸岡信裕先生S48、山梨：田邊譲二先生S47、静岡：岡井高先生S52、能登：吉村光弘先生S56、福井：久保田紀彦先生S43、愛知：篠田雅幸先生S51、京都：辻和夫先生S53、大阪：橋本久仁彦先生S62、岡山：浅海浩二先生H8）よりご挨拶をいただいた。その後議事審議に移り吉崎智一会計理事から令和3年度事業および会計決算報告、川浦幸光監事より監査報告がなされ承認された。また理事長の土屋より令和4年度事業計画、および吉崎会計理事より予算（案）の説明があり、承認された。

役員改選では、理事長土屋の退任に伴う後任として、中村裕之先生が就任、会計理事の後任には原田憲一先生が就任との説明があり、承認された。

教授就任記念講演

総会後には教授就任記念講演会が行われた。消化管外科学／乳腺外科学の稲木紀幸教授が「低侵襲外科学のあゆみと将来展望」、血管分子生理学の内藤尚道教授が「生理と疾患病態における血管の細胞多様性の理解を目指して」、分子細胞病理学の前田大地教授が「外科病理学とゲノミクスの融合」、血液内科学の宮本敏浩教授が「造血器腫瘍の最新治療と今後の展望」と題した研究紹介をされ、参加者一同、新進気鋭の先生方のご活動と成果に感銘を受けながら聴き入った。

新型コロナウイルス感染症拡大を鑑み、恒例の懇親会は行われず、教授就任講演終了後閉会となった。また教授就任講演会の様子は、後日オンライン配信として同窓会ホームページにてWeb配信された。

（土屋　弘行：記）

物故会員

（令和３年９月～令和４年８月の連絡）

米沢　森三	昭和18年卒業
浅野　博	昭和18年専卒業
越野　民男	昭和18年専卒業
蒲原　義夫	昭和20年卒業
野村　欽一	昭和20年卒業
吉崎　亮	昭和20年卒業
三平　洋一	昭和20年専卒業
的場　清	昭和22年卒業
林　隆文	昭和23年卒業
服部　義明	昭和23年専卒業
前田　孝美	昭和23年専卒業
佐藤　純	昭和24年卒業
木田　威俊	昭和24年専卒業
宮崎　修	昭和24年専卒業
山下　文雄	昭和24年専卒業
加藤　允	昭和25年専卒業
川北　正	昭和25年専卒業
清水　卓蔵	昭和25年専卒業
髙木　弘	昭和25年専卒業
福田　齊	昭和25年専卒業
湯浅　俊男	昭和25年専卒業
谷野　淳	昭和26年卒業
土肥　理邦	昭和26年卒業
土肥　三郎	昭和26年専卒業
中川　功	昭和28年卒業
中村　晋	昭和29年卒業
上田　巖	昭和30年卒業
木村　肇	昭和30年卒業
中谷　藤房	昭和30年卒業
林　鋭雄	昭和30年卒業
冨永　淳	昭和31年卒業
小田島粛夫	昭和32年卒業
滝澤　進	昭和32年卒業
八田辰四郎	昭和32年卒業
荒川　龍夫	昭和33年卒業
紙尾　健二	昭和33年卒業
赤祖父一知	昭和34年卒業
田丸　忠良	昭和34年卒業
河田　幸道	昭和35年卒業
昇塚　清臣	昭和36年卒業
西野　広	昭和36年卒業
浅野　周二	昭和37年卒業
大谷　信夫	昭和37年卒業
樋口　正樹	昭和37年卒業
和田　汪	昭和37年卒業
北山　元昭	昭和38年卒業
炭谷　治郎	昭和38年卒業
中西　功夫	昭和38年卒業
森井　孝侑	昭和38年卒業
武田　博子	昭和38年卒業
大間知　哲	昭和39年卒業
木村　功	昭和39年卒業
三嶋　勉	昭和39年卒業
小西二三男	昭和41年卒業
神田　静人	昭和42年卒業
杉井　衛	昭和44年卒業
地引　逸亀	昭和44年卒業
白木　徹一	昭和48年卒業
入道　秀樹	昭和51年卒業
木戸美奈子	昭和53年卒業
市原　強	昭和60年卒業
松田　文子	昭和61年卒業
山本　環	昭和62年卒業
川森　康博	昭和63年卒業
寺島　良彦	昭和63年卒業
吉江　祐	平成14年卒業
木村　圭一	大学院
太田　俊雄	Ⅱ会員
田　和子	Ⅱ会員
中野　明	Ⅱ会員
能登　佐	Ⅱ会員
三林　蓉子	Ⅱ会員
宮澤　秀	準会員

（敬称略）

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
会員のご不幸は当会にご一報をお願いいたします。

総 会 記 事

令和３年度決算報告ならびに令和４年度予算について

令和3年度決算

表1に一般会計の決算書を示す。会費収入は減少傾向であったが、その減少幅は最小限なものとなった。本年度も会報編集委員会による広告収入（自助努力）があった。支出は新型コロナ感染症拡大の影響に伴い、学生課外活動補助、支部への補助が削減された。全体としては会費収入は激減するも、広告収入によりなんとか支出とのバランスをとっている。付随する特別会計では、十全同窓会基金会計収入は資産運用で得た利息、6年ぶりの名簿改訂事業への繰入れがあった。また高柳奨学金は、奨学生の1名の採用であった（表2～5参照）。

令和4年度予算

会費、広告収入は努力目標を計上した。会費納入率は長期において低下が持続しており、納入率向上の努力が必要とされている。新入会員の納入率低下は、引き続き低落傾向を示している（図）。学類在籍中から多方面で働きかけることにより、帰属意識の向上を図り、新入会員の納入率を増加させることが最大の課題である。

本年度は新規事業として医学類４年生へのドクターコート贈呈にかかる予算を計上した。また会費納入方法には選択肢（振替用紙・自動振替・ネットバンキング）の周知を続けている。名簿会計支出には名簿改訂・発送にかかった支払予定金額を計上した。高柳奨学金は、奨学生１名の採用予定である。

（会計担当　吉崎　智一：記）

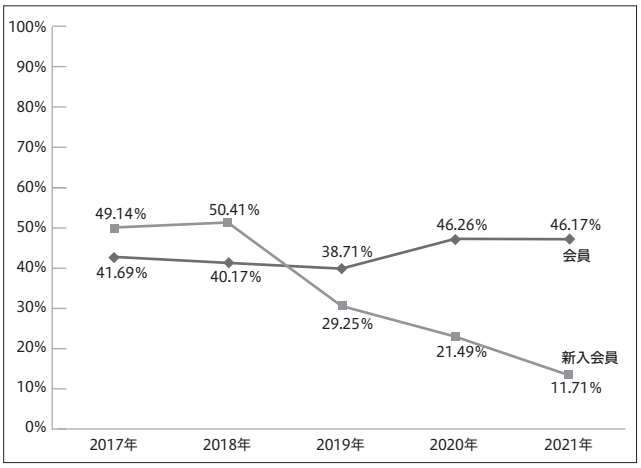
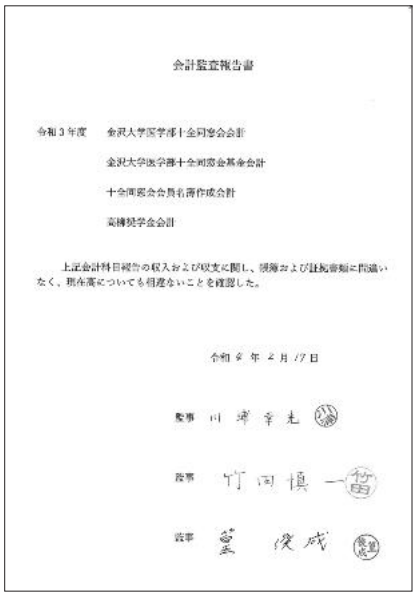


図　過去5年間の会費納入率と新入会員の納入率の推移


会計監査報告書

令和３年度　金沢大学医学部十全同窓会会計
金沢大学医学部十全同窓会基金会計
十全同窓会会員名簿作成会計
高柳奨学金会計

上記会計科目収入および収支に関し、帳簿および証拠書類に間違いなく、現在高についても相違ないことを確認した。

令和４年２月17日

理事　川端幸夫
理事　竹内慎一
監事　[illegible]

会計監査報告書

春の叙勲

藍綬褒章

數川　悟（Ⅱ会員）

瑞宝中綬章

鏡森　定信（昭和43年卒業）
泉　良平（昭和47年卒業）
清木　元治（昭和56年度大学院修了）
原田　実根（Ⅱ会員）

瑞宝双光章

梶原　光令（昭和41年卒業）
姫野　洋一（Ⅱ会員）

総 会 記 事

表1　令和3年度決算書

自　2021年　1月　1日
至　2021年12月31日

収入				支出			
科　目	予　算(円)	決　算(円)	摘　要(円)	科　目	予　算(円)	決　算(円)	摘　要(円)
前年度繰越金	2,202,140	2,202,140		事業費	6,446,305	6,189,003	会報・総会チラシ編集・印刷・製本・封入代　3,379,516
							会報発送代・理事会関係発送　1,771,932
							便箋　52,800
							会報発送封筒　100,650
会費収入	12,572,000	11,351,000	令和3年度会費				十全医学会学術交流会支援　130,000
			4,000円×1,934人				関連病院長会議・関連病院渉外費　200,000
			過年度分　345人				新入会員卒業祝（USBメモリー）@2,255×111個　250,305
			令和4年度以降　23人				ホームページ・会員情報サイト管理　217,800
			準会員会費　6,000円×101人				北陸銀行ビジネスIBスタンダード基本料　66,000
			5,000円×3人				新入会員管理サイトログイン情報通知　20,000
雑収入	500,000	313,000	会報掲載広告収入	旅　費	1,300,000	319,000	
			50,000円×0社　0	慶弔費	100,000	29,644	弔電・生花
			45,000円×1社　45,000	会議費	480,000	217,708	総会、理事会、会報編集委員会
			36,000円×1社　36,000	補助費	170,000	0	西医体補助　0
			30,000円×3社　90,000				医学展補助　0
			15,000円×2社　30,000				「大学院医学系研究科」進学説明会補助金　0
			12,000円×1社　12,000				
			寄附　100,000	事務費	4,000,000	3,793,536	会費払込料金、パソコン・プリンターメンテナンス等一式・通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料　793,536
利　息		6					
							人件費　3,000,000
				支部への補助費	500,000	0	
				予備費	2,277,835	146,500	
				繰越金		3,170,755	
計	15,274,140	13,866,146		計	15,274,140	13,866,146	

表2　令和3年度　十全同窓会基金会計

自　2021年　1月　1日
至　2021年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
前年度繰越金	47,352,413		名簿会計へ繰入	2,300,000	
利　息	45,987	利付国債/定期預金			
計	47,398,400		計	2,300,000	残高　45,098,400

表3　令和3年度　十全同窓会名簿作成会計

自　2021年　1月　1日
至　2021年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
繰越金	433,051		通信費	1,528,881	調査費等請求分、名簿発送費
協賛金	3,848,000	免除会員	会議費	810,000	編集委員調査費・学年担当謝礼図書券
基金からの繰入	2,300,000		事務費	368,896	払込手数料・文書印刷
計	6,581,051		計	2,707,777	残高　3,873,274

表4　令和3年度　高柳奨学金会計

自　2021年　1月　1日
至　2021年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
前年度繰越金	3,940,565		奨学金	300,000	令和3年度　奨学生1名（25,000円/1ヶ月）2021年4月～2022年3月分
利　息	51	定期預金利息	事務費	440	残高証明発行手数料
計	3,940,616		計	300,440	残高　3,640,176

表5　令和4年度　予算書

自　2022年 1月 1日
至　2022年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
前年度繰越金	3,170,755		事業費	7,146,145	会報・総会チラシ編集・印刷・製本・封入代　3,400,000
					会報・理事会関係発送　1,800,000
会費収入	12,097,000	令和4年度会費			発送用封筒代・会費払い込み用紙　200,000
		4,000円×2000人　8,000,000			関連病院長会議・関連病院渉外費　200,000
		過年度分　3,200,000			十全医学会学術交流会支援　200,000
		令和5年度以降　200,000			新入会員卒業祝（USB）@2,255×111本　250,305
		準会員会費　6,000円×112人　672,000			ホームページ会員情報サイト管理　220,000
		5,000円×5人　25,000			北陸銀行Web基本料　66,000
					ドクターコート贈呈（医学類4年生：SD認定証書授与式にて）　809,840
雑収入	500,000	会報掲載広告収入、利息			男性用　@6,730×88着（大学名刺繍込み）
					女性用　@6,400×34着（大学名刺繍込み）
			旅　費	1,300,000	各支部総会出張旅費、各支部長総会招待旅費
			会議費	480,000	総会、理事会、会報編集委員会
			慶弔費	100,000	弔電・生花
			補助費	170,000	学生課外活動補助
					医学展　50,000
					西医体　100,000
					金沢大学大学院医薬保健総合研究科（修士課程及び医学博士課程）・
					先進予防医学研究科　進学説明会補助　20,000
			事務費	4,300,000	会費払込料金、パソコン、プリンター修理等一式・感光体・トナー、
					通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料　1,000,000
					人件費　3,300,000
			支部への補助	500,000	500,000
			予備費	1,771,610	
計	15,767,755		計	15,767,755	

表6　令和4年度　十全同窓会基金会計　予算

自　2022年 1月 1日
至　2022年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
前年度繰越金	45,098,400				
利　息	45,996	利付国債			
計	45,144,396		計	0	残高　45,144,396

表7　令和4年度　十全同窓会名簿作成会計　予算

自　2022年 1月 1日
至　2022年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
繰越金	3,873,274		事務費	450,000	払込手数料、訂正シール、添書、名簿封入・発送準備一式
協賛金	400,000	免除会員	通信費	200,000	名簿発送料・郵便料
広告費	2,032,800	福田商店	会員名簿	5,159,440	2021会員名簿編集・印刷・製本一式　@1,144×4,100冊
計	6,306,074		計	5,809,440	残高　496,634

表8　令和4年度　高柳奨学金会計　予算

自　2022年 1月 1日
至　2022年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
前年度繰越金	3,640,176		奨学金	300,000	令和4年度奨学生　1名　¥25,000×12カ月（2022.4月～2023.3月）
利　息	51	定期預金利息	事務費	440	残高証明発行手数料
計	3,640,227		計	300,440	残高　3,339,787

教 授 就 任 講 演

低侵襲外科学のあゆみと将来展望

消化管外科学／乳腺外科学 稲木 紀幸

外科腫瘍学における背景

消化器がん手術において、近年、術後の合併症が全生存率を悪くするということが明らかになってきた。外科侵襲により術後の合併症は避けられないという課題は残るが、高齢化や併存疾患、進行度の高い手術患者が増加してきたことも、術後の合併症を増加させる要因となっている。食道、胃、大腸がんのいずれも、合併症がある場合はない場合に比べて、全生存率のハザード比が1.5を超える高い数字であることが報告されている。合併症により、補助化学療法のコンプライアンスが悪くなることも生存率を下げる要因となる。一方で、低侵襲食道切除は術後合併症を軽減するという報告や、ロボット食道切除はQOLがよく機能改善が早いということが報告され、低侵襲手術や機能温存、ロボット手術が今後、がん根治術後の生存率を上げるカギになることが示唆される。

低侵襲外科学へのいざない

1983年、腹腔鏡手術の始まりと言われている腹腔鏡下胆嚢摘出術が開発される前の時期に、人工肛門を回避し直腸がんを根治切除することを実現した、経肛門的内視鏡下マイクロサージェリーという画期的な手術法がドイツで開発された。この手術を日本に導入し、1990年代の日本における低侵襲手術を切り拓いたのが、金沢大学の外科医だった。私が医学生であった1995年、その低侵襲手術を目の当たりにし、外科手術の可能性に魅了され、迷いなく外科の道を選択した。外科学教室に入局し、基本外科手術の研鑽を積む中、低侵襲手術には、それを可能にする革新的な手術機器開発、機器を使いこなすトレーニングが重要であることを認識した。外科教室の先達の軌跡に導かれ、2004年から約2年間、ドイツテュービンゲン大学に留学の機会を得て、臨床、研究、教育において低侵襲外科学の真髄を学んだ。

低侵襲外科学の探求

帰国後は3つの主軸を掲げ、低侵襲外科学を探究してきた。① 低侵襲手術：「機能温存と個別化」、「安全性と根治性」を臨床研究で評価し、合併症を減らす精緻なロボット手術の実証、そして臓器温存と予後に関する観察研究を行ってきた。② 手術機器開発：日本人の特性を生かした手術機器開発を行い、根治、機能温存を追求してきた。③ 外科教育：ドイツで学んだトレーニング理論を応用し、教育ネットワークの構築を図ってきた。

「機能温存、個別化における臨床研究」

胃がんにおけるセンチネルリンパ節を指標とした転移診断に関する臨床試験に参画し、センチネルリンパ節の同定率が97.8%であることを証明した。引き続き先進医療Bとして、センチネルを指標とした個別化手術の有用性を検証し、生存率の検証中である。内視鏡と腹腔鏡による併用手術はこの概念を応用した、最小侵襲術式としてさらなる追求を行っている。

「進行胃がんに対する腹腔鏡手術の検証」

抄録執筆時現在、治療ガイドライン上、腹腔鏡手術は臨床病期I期までが治療方法の選択肢となっている。進行がんに対する腹腔鏡手術の妥当性を、エビデンスの高い多施設共同のRCTに参画し検証を行った。2相試験から開始し3相試験を終え、5年生存率の検証が行われ、腹腔鏡手術の開腹手術に対する非劣性が証明された。ガイドラインを変え得る検証結果となった。

「ロボット支援手術の発展」

ロボット支援手術は外科手術の大きな飛躍である。特に、その精緻さが合併症を軽減することが明らかになってきた。胃がん手術では、膵液瘻が６％から３％に半減され、食道がんでは、反回神経麻痺が13%から5%と3分の１に軽減された。ロボット手術は、合併症を軽減するだけでなく、高度進行がんの根治的切除の可能性、外科医の省力化、遠隔化、教育的意義も期待されている。既に、金沢大学消化管外科領域では適応術式の拡大を行い、関連病院における新規ロボット手術の導入、ロボット手術指導医の育成の成果をあげている。

「手術機器・術式の開発」

ドイツで手動式自由度鉗子の開発と評価に参画し、実験的・臨床的評価を行い、トレーニング方法を確立した。帰国後すぐに日本導入を遂行し、2006年4月、金沢大学において日本で初導入を行った。「革新的内視鏡下消化管吻合術の開発と評価」の課題で研究費を獲得し、術式の開発や普及に努めた。体壁破壊を究極に軽減する単孔式胃切除術を開発し、さらに、直径2.1mmの細径鉗子を補助とした単孔式胃切除術を確立した。これは、低侵襲手術をさらに個別化に適応する選択肢を拡げたといえる。手術機器開発の特許以外にも、2021年に金沢大学において、術者の手ブレを防ぐための矯正トレーニング機器開発で特許を取得した。

「外科教育」

ドイツで学んだ低侵襲外科トレーニング方法・理念を日本でも導入し、トレーニングシステムを実践した。外科は手技ということを通じて、スキルアップの評価が行いやすく、その成果をモチベーションとして、若手医師は外科に対する興味をもつことを実証してきた。「見て学べ」、「技を盗め」教育論から、IoTやVR、AIを駆使した科学的な教育論にシフトしている。

将来展望

手術侵襲や合併症を低減し、薬物治療などを融合した集学的治療により治療成績や生活の質を向上させていく時代となってきている。これまでに行ってきた3つの主軸はもとより、大学の強みである基礎研究との融合を促進し外科学の発展に努めたい。

最後に、組織づくりの展望にける基本理念は「人は宝」である。

・多様性を尊重し助け合う
・伝統に敬意を表し革新を目指す
・地域に根差し世界に発信する

この3つを信条に掲げ、多くの宝が集まる組織づくりを目指したい。

生理と疾患病態における血管の細胞多様性の理解を目指して

血管分子生理学　内藤　尚道

体の隅々まで張り巡る血管は、階層構造を有する全身性の循環ネットワークを形成して生命活動を支えている。血管は周囲のさまざまな細胞との相互作用を通じて物質交換と細胞応答を制御し、炎症、がん、アレルギー、線維化などさまざまな疾患の病態形成に深く関与する。特に既存の血管から新たな血管が構築される過程である血管新生は、これらの病態形成で共通して生じる生命現象である。近年、腫瘍を栄養する腫瘍血管、さらには眼の新生血管を標的とした血管新生阻害療法が広く臨床応用されている。血管新生阻害療法は、主として血管の内腔を覆う単層扁平上皮細胞である血管内皮細胞の増殖因子、血管内皮増殖因子（vascular endothelial growth factor；VEGF）を標的として開発されてきた。VEGFは組織が低酸素状態に陥ることで分泌され、既存の血管内皮細胞に働き、新たな血管を構築する。VEGFとその受容体であるVEGF受容体（VEGFR）を阻害することで、血管内皮細胞の増殖が抑制され、血管新生は阻害される。血管新生に関わる分子機序の解析は進んではいるが、未だに血管新生を完全に制御することは不可能であり、血管の分子生理および病態生理のさらなる研究と、新たな分子機序に基づく治療標的の探索が求められている。

血管新生阻害剤の標的である、血管内皮細胞は血管の機能を担う重要な構成細胞である。電子顕微鏡の発達とともに各組織・臓器特異的にさまざまな形態を呈することが明らかとなり、さらには各組織・臓器内でも、その局在と機能により細胞多様性を認めることが非常に良く知られている。一方で、血管新生の研究を含め現在の血管研究では、全ての血管内皮細胞は本質的に同じであるとされ、19世紀半ばにWilhelm Hisにより血管内皮細胞が報告されて以降、血管内皮細胞は1種類しか存在せず、細胞多様性は高い細胞可塑性に起因するとされてきた。実際に細胞培養実験や組織への移植実験を行うと、血管内皮細胞は細胞多様性を獲得することから、高い可塑性を示すことは明らかである。そのため、現在の血管研究では、血管内皮細胞が関与するさまざまな生命現象において、血管内皮細胞の機能的および構造的な細胞多様性は充分に考慮されていない。例えば上述した、血管新生においても、均等な能力を持つ血管内皮細胞がサイトカインや血流に応じて確率論的に活性化することで、特殊な表現型を持つ細胞が一過性に出現して、新たな血管が形成されると考えられている（図1）。この血管新生のモデルでは、血管新生を引き起こす背景となる病態や、血管新生が生じる臓器の差異はあまり検討されておらず、血管内皮細胞の多様性に関しては考慮されていない。

しかし、実際は血管内皮細胞の発生学的由来や細胞特性の獲得および維持機構は非常に複雑であり、細胞多様性は発生初期から遺伝子発現により制御されていることが明らかになっている。我々は、血管内皮細胞は均一であるという既存の概念は必ずしも正確ではなく、血管内皮細胞には本質的に性質の異なる細胞分画が存在しているとの仮定のもと、血管研究に取り組んできた。血管は機能と形態が非常に良く相関するため、これまで血管研究は形態学および組織学を中心に発展してきた。一方で細胞1つ1つの性質はこれまであまり解析されていなかったため、1細胞レベルでの細胞多様性研究に関しては研究手法も含めて発展してこなかった。そこで、我々は血管を含む臓器全体を独自の手法で1細胞レベルまで分散して、フローサイトメーターを用いて、血管内皮細胞の細胞多様性を解析する手法を確立し、実際に血管内皮細胞の解析をおこなった。その結果、血管内皮細胞には増殖能力という点で細胞多様性を認め、さらに血管内皮細胞の移植実験を行うと、血管内皮細胞は階層性を持ち、幹細胞様の特殊な機能を持つ血管内皮細胞が存在することが明らかになり、その結果を世界に先駆けて明らかにした（図1）。幹細胞様の性質を持つ血管内皮細胞（血管内皮幹細胞）は、たった1つの細胞から血流を持つ血管ネットワークを構築することができる。また血管新生阻害剤に対する耐性を示し、既存の薬剤に対する耐性化の一因であった。

近年、遺伝子発現解析技術の進歩により1細胞レベルで網羅的遺伝子発現解析が可能になり、血管を構成する細胞のさらなる細胞多様性と疾患病態の関連が明らかになりつつある。現在1細胞遺伝子発現解析や高解像度の血管イメージングを駆使して、血管の細胞多様性が持つ生物学的意義の解明に取り組んでいる。今後、さらに先進的な解析技術を積極的に取り入れ、血管研究を通じて生命現象と疾患病態を理解し、医学の発展に貢献したいと考えている。

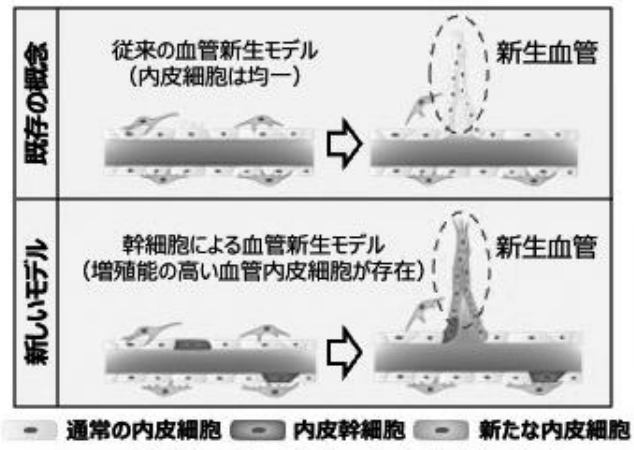


図1　増殖能の高い特殊な血管内皮細胞が、新生血管を構築する。

教授就任講演

外科病理学とゲノミクスの融合

分子細胞病理学 前田 大地

近代病理学はRudolf Virchowを祖とし、「疾患は細胞の異常によって生じる」という概念のもと、組織形態を顕微鏡下で観察することで発展してきた。病理学が扱う対象は腫瘍性疾患から炎症性疾患、変性疾患にいたるまできわめて幅が広い。また、一言で病理学研究といっても純形態学的なアプローチをとるものから分子生物学的アプローチをとるものまで多様である。その中で、外科病理学（surgical pathology）は手術、生検、剖検によって採取されるヒト組織を検討対象とする学問で、臨床病理学、病理診断学といったものとほぼ同義である。実際の成り立ちは、主に病理医や病理診断業務に携わる者が、実臨床において経験する症例をもとに仮説検証を行っていく研究系であり、基礎医学分野の中では臨床に近い領域だと言える。過去50年の間に、外科手術のみならず内視鏡技術が著しく発達したこと、そして種々の生検デバイスが開発されたことによって、我々病理医が扱う検体の種類、総数は著しく増えた。そして、病理診断に求められる精度も年々高まっている。その過程で、病理診断の精度向上といった臨床病理学的な研究を志向する傾向が強まってきているものの、同時に、根源的な生命現象の解明を目指すような、より基礎的な病理学研究を行うことも重要であり、両者のバランスをとって人材育成、研究活動を行っていく必要がある。どちらのアプローチをとるにせよ、光学顕微鏡下で病理組織標本を正確に評価する技量を習得することは必須要件であり、金沢大学においては、まず第一に病理医の育成に励みたいと考えている。

近年のゲノム科学の進歩は著しく、その成果が様々な形で外科病理学の領域に落とし込まれている。私が病理学研究に従事するようになった2000年以降は、cDNAマイクロアレイによって全身諸臓器のがんの遺伝子発現プロファイルが明らかとなり、腫瘍特異的、もしくは組織亜型特異的なマーカーが多数確立された。それらは免疫組織化学マーカーという形で実地病理診断に応用されている。同時に、サンガーシーケンスによる既知の腫瘍関連遺伝子の変異検出が進み、背景遺伝子異常の違いによって腫瘍を再分類する流れが加速した。腫瘍entityに特異的な遺伝子異常を検出することは、病理診断の上でも有用となる。我々は、卵巣microcystic stromal tumor（MCST）と膵臓solid pseudopapillary neoplasm（SPN）の間に組織形態学的な類似性、蛋白発現パターン（CD10, vimentin陽性）の共通性があることに着目し、膵SPNで生じているWnt/β-catenin経路の異常が卵巣MCSTの成因に関与しているのではないかと考え、検証を行った。その結果、卵巣MCSTの全例においてβ-cateninの異常核内集積が見られること、大多数の症例において*CTNNB1*遺伝子の体細胞変異が生じていること、一部の症例は家族性大腸腺腫症（*APC*遺伝子の生殖細胞変異による）の一環として生じることを明らかにした。鑑別対象となる卵巣腫瘍においてβ-catenin異常が検出されることがきわめて稀であることから、現在、卵巣MCSTはβ-catenin異常に特徴づけられる特異な卵巣腫瘍だと理解されるに至り、病理診断に際してはβ-cateninの免疫組織化学がルーティーンで行われている。組織形態と背景遺伝子異常の相互連関性は重要なテーマであり、今後は、婦人科腫瘍領域のみならず、全身諸臓器を対象として研究を発展させていきたい。

さて、次世代シーケンサー登場後、TCGA研究に代表されるように、主要ながんの遺伝子異常は網羅的に解析され、新規の腫瘍関連遺伝子が多数同定されてきた。また、同一患者のがんであっても病巣（原発巣および転移巣）によって遺伝子異常の蓄積パターンが異なることが明らかとなり、所謂「腫瘍内不均一性」をどのように捉えるかが新たな課題として出現した。我々は、腫瘍内不均一性を評価するうえで、病理解剖検体にゲノミクスを応用するアプローチが有効だと考え、rapid autopsy projectを立ち上げ、解析を行ってきた。具体的には屍体血中の遊離DNAの全エクソン解析を施行することで、全身の癌巣において生じている遺伝子変異の概要を把握することが可能であることを示し、“Liquid autopsy”の概念提唱に至っている。病理解剖には直接死因の解明にとどまらない学術的な価値を生み出すポテンシャルがある。ゲノミクスを含め、新たな技術を導入することで、病理解剖の在り方、そして病理解剖研究を進化、深化させていきたいという願望を抱いている。

造血器腫瘍の最新治療と今後の展望

血液内科学　宮本　敏浩

全ての造血器疾患は造血幹細胞システムの破綻に起因しており、正常造血システムの理解は疾患の治療に直結する。1970年代にフローサイトメトリーが開発され、造血幹細胞や各系統に分化する過程にある造血前駆細胞、さらに白血病幹細胞が純化できるようになった。各分化段階・成熟段階にある前駆細胞群を用いて分化決定における転写因子等の働きとその異常による分化停止、細胞増殖機構の理解が進み、白血病発症に関与する分子群が明らかにされてきた。さらに2000年代に次世代シーケンサーが開発され、網羅的にゲノム異常やエピジェネティクス異常が同定されることで、白血病発症に関与する遺伝子異常は、長期に渡り自己再生をする造血幹細胞に集積して段階的に白血病幹細胞へと形質転換する過程が可視化できるようになった。

マルチオミクス技術により明らかにされた白血病ゲノム異常に対する標的治療薬の開発が進み、白血病治療戦略に大きなブレークスルーが得られつつある。急性白血病は、初発時から複数の遺伝子変異が複雑多様に組み合わされたマルチクローンで構成されているため、治療標的となり得るドライバー変異（actionable mutation）を網羅的に検出し、薬剤を投与する個別化ゲノム医療が実現しつつあり、FLT-3阻害剤、チロシンキナーゼ阻害剤等が臨床現場で一定の効果を挙げている。またactionable mutationに特異的に作用する新規分子標的薬剤に加え、遺伝子変異のタイプに依存せず、白血病細胞に共通する細胞生物学的特性を標的とした新規薬剤や、白血病細胞表面に高発現する分子を標的としたCART、BiTEなどの免疫細胞療法など、数多く開発されている。これらの薬剤は、特定のactionable mutationを有さない白血病サブクローンに対しても有効性を示す点がメリットであり、遺伝子変異特異的な治療を補填できる。

白血病病態の理解とともに白血病治療は大きな進化を遂げ、多くの新薬の開発が進行中であり、血液内科医としては非常にエキサイティングな時代を迎えた。造血幹細胞移植術も造血幹細胞システムを理解した上で成立している。今後も造血幹細胞システムの理解を基盤として、新たな分子標的薬が開発され、ゲノム変異に対する薬剤や変異に依存しない新規薬剤など複数のmagic bulletを用いて治療戦略が大きく変わることで、白血病の治療成績の向上が期待される。

受　　賞

第18回 金沢大学十全医学賞受賞

前島　隆司
（平成13年度大学院修了）
統合神経生理学

この度「中枢概日時計及び睡眠覚醒制御回路におけるGABA作動性伝達の機能的役割の解明」の研究に対し、第18回金沢大学十全医学賞を賜りました。以下、研究内容を概説いたします。

ヒトを含む哺乳類の行動や身体機能は、体内時計により約24時間周期のリズムを保つように調節されています。脳内の視交叉上核（SCN）に存在する中枢時計は、時計遺伝子の働きをもとに安定したリズムを生成し、外部に時間情報を配信しますが、一日のうち適切な時間に動物の行動や身体の機能をオン・オフに切り替える、いわばタイマー機能を発動させる回路のメカニズムについては多くの疑問が残っています。今回、SCNの背内側に局在するバソプレシン/GABA神経群が、GABAを介する神経伝達により核内の神経活動を調節し、動物が行動を起こす時間帯を形成していることを見出しました。バソプレシン神経から特異的にGABAの放出能を欠損させた遺伝子改変マウスは、時計遺伝子のリズムには異常がないものの、SCN回路の神経活動は昼と夜の両方にピークを生じる二峰性のリズムを示し、その神経活動が低下する時間帯に動物の行動が表出することが分かりました。このような行動を起こす時間帯を設定するメカニズムの解明は、生活リズムの乱れに起因する睡眠障害や自律神経失調症などの身体疾患に対する予防と治療法の開発につながるものと期待されます。

本研究に対し、ご指導、ご支援いただいた金沢大学医薬保健研究域医学系統合神経生理学三枝理博教授、筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構櫻井武教授、共同研究者の皆様、そして統合神経生理学分野の皆様に心より感謝申し上げます。

JJR excellent reviewer award in 2021受賞

米田　憲秀
（平成15年卒業）
金沢大学附属病院放射線科

この度、JJR excellent reviewer award in 2021を受賞いたしました。本賞は日本医学放射線学会の会誌であるJJR（Japanese Journal of Radiology）の査読員として、一度の遅滞もなく高頻度に査読を行った者に対して贈られる賞となります。このような栄誉ある賞を受賞したことは、自分も日本医学放射線学会に微力ながら貢献できていると感じることができ、嬉しく思いました。査読という仕事は、投稿された論文を専門の知識をもって、その雑誌の掲載にふさわしいか判断する作業です。査読者も、査読を通して知識が増えたり、知識の整理ができたり、現在の研究のトレンドも感じることができたりとメリットがあります。また査読を通して論文作成時のさまざまな注意点を知ることができ、自分自身や後輩の論文作成時に、そのノウハウを活用することもできます。ただし、実際は労力もかかるので、特に忙しい時期に査読依頼が来ると大変な部分があるのも事実ではありますが、この受賞を糧にこれからもより邁進していきたいと思っています。

最後になりましたが、今回の受賞は多くの先生方のご指導とご支援の賜物と存じます。これまで多くのご指導、ご支援をいただきました、金沢大学名誉教授の松井修先生や金沢大学大学院医薬保健学総合研究科内科系医学領域放射線科学蒲田敏文教授をはじめ、教室の多くの先生方、大学院時代に研究の基本をご指導いただいた金沢大学医薬保健研究域医学系人体病理学教室名誉教授の中沼安二先生や人体病理学教室の先生方に深く感謝いたします。今後もご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第138回中部日本整形外科災害外科学会学会奨励賞受賞

米澤　宏隆
（平成25年卒業）
金沢大学整形外科

この度、令和4年4月8日から9日にかけて開催されました、第138回中部日本整形外科災害外科学会・学術総会において学会奨励賞（基礎部門）を受賞いたしましたので、謹んでご報告申し上げます。

私の研究テーマは、「液体窒素処理担癌神経グラフトを用いた新しい末梢神経再建法」というもので、土屋弘行教授が開発された悪性腫瘍切除後の液体窒素処理骨再建法を、神経再建に応用を広げるための基礎実験でございました。私自身、骨軟部腫瘍グループに所属し、患者さんを診療する中で、骨軟部肉腫の広範切除とともに合併切除された神経がもったいないな、と感ずることがございました。切除後の神経断端は、患肢の機能損失のみならず、神経痛の原因にもなりますので、一度切除した神経を液体窒素処理で殺細胞化し、神経縫合を行って再建することで、よりよい患肢再建につながることが期待されました。結果、動物実験により、液体窒素処理神経移植は自家神経移植とほぼ同等の成績であることが分かりました。山本憲男先生のご発案で1年に経過観察期間を延長したことも本研究の強みになりました。尚、ラット坐骨神経を用いた実験系でございましたが、縫合手技に関しては、多田薫先生をはじめとする手の外科グループの諸先生方に教えていただきました。将来的に本技術がヒトに応用され、よりよい患肢温存術の一助となればと願っております。

最後に、今回の受賞にあたりご指導いただきました整形外科教授の土屋弘行先生や、山本憲男先生、手の外科グループ多田薫先生をはじめ教室の先生方に感謝申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

第138回 中部日本整形外科災害外科学会 学会奨励賞受賞

淺野　陽平
（平成27年卒業）
金沢大学附属病院整形外科

この度、2022年4月に開催された第138回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会において、「脂肪腫と異型脂肪腫様腫瘍/高分化型脂肪肉腫の鑑別における臨床的特徴と新しいスコアリングシステム」という演題で学会奨励賞を受賞することができましたので、謹んでご報告申し上げます。

本研究は、良性と悪性の軟部腫瘍で最も頻度が高い脂肪腫と異型脂肪腫様腫瘍（ALT）/高分化型脂肪肉腫（WDLS）を、簡易かつ正確に鑑別可能な新しいスコアリングシステムの作成を目的として立案しました。両者は画像・病理所見が類似しており、鑑別に難渋する症例を経験しますが、治療方針が異なるため正確な診断が求められます。今回われわれは、145例の患者背景・MRI所見・HE染色による病理所見に着目した統計学的解析によって、両者の鑑別における特徴的所見（腫瘍の最大径、下肢発生、深部発生、腫瘍内部の>2mmの隔壁構造・造影効果、脂肪芽細胞）を明らかにしました。これらの6項目をオッズ比に準じて配点し、総合点で評価する新しいスコアリングシステムを作成し、検証用コホート40例において感度80.0％、特異度96.7％、正確度92.5％という高い診断精度を示しました。多くの医療施設で行われている検査項目で構成された簡易なスコアであり、かつ高い診断精度を有しており、臨床現場で多くの先生方に使用されることを期待しております。

今回の受賞にあたり、ご指導をいただきました土屋弘行教授、山本憲男先生をはじめ教室の先生方に深謝致します。今回の経験を今後の臨床・研究活動にいかせるよう、より一層精進致します。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。

Japanese Journal of Radiology 最優秀論文賞受賞

櫻井　孝之
（令和3年度大学院修了）
金沢大学附属病院放射線治療科

この度、私共の論文がJapanese Journal of Radiology最優秀論文賞に選出いただきましたので謹んで報告申し上げます。

論文テーマは高リスク前立腺がんに対する外照射併用単回高線量率組織内照射の有害事象および治療成績を評価することと有害事象と臓器線量の関連を解析することでした。前立腺がんはT分類やPSA値、Gleason scoreによってリスク層別化され治療が行われます。非常に予後良好な低リスク群では侵襲的治療を行わない監視療法が選択されることもありますが、高リスク群は予後不良であり積極的治療が必要で放射線治療を行うにあたり如何に根治性の高い放射線治療モダリティを選択するかが重要となります。ただ、根治性を求めた強度の強い治療を行うと時に放射線有害事象が問題となることがあります。前立腺がんに対する高線量率組織内照射は腫瘍への線量集中性に優れ、急峻な線量勾配により正常組織の線量低減が可能な治療で、特に高リスク群において外部照射との併用治療は治療効果や有害事象の点で優れた治療と考えております。今回はその点ついて明らかにすることができ、有害事象予測因子の同定も行いました。この結果を今後の治療計画に反映させて更なる有害事象低減に努めていきたいと思います。

今回の受賞を励みに今後も放射線治療の研究に尽力していく所存であります。論文作成にご指導いただいた金沢大学放射線科学蒲田敏文教授、髙松繁行先生、金沢大学泌尿器集学的治療学溝上敦教授、岐阜大学放射線科熊野智康先生をはじめ共著者の皆さまに心より感謝申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

日本医学放射線学会総会（JRC2022） CyPos silver medal受賞

高松　　篤
（大学院生）
金沢大学附属病院放射線科

この度、日本医学放射線学会総会（JRC2022）でCyPos silver medalを受賞いたしましたので報告させていただきます。ご指導いただきました共同研究者の先生方、教室の諸先生方に深く感謝いたします。

受賞したテーマは「PEG化G-CSF製剤関連大動脈炎；単施設における薬剤処方データベースとCT画像を用いた後方視的検討」です。G-CSF製剤は化学療法における好中球減少に対して広く用いられています。近年、G-CSF製剤の重大な副作用として大動脈炎が報告され添付文書にも記載されました。その報告はいずれも、症例報告や特定の疾患群における有症状例に基づいており、実臨床における正確な頻度は不明です。本研究では薬剤部のPEG化G-CSF製剤（商品名：ジーラスタ）の投与データとCTデータベースを用いて網羅的に大動脈炎の頻度を検討しました。これらのデータベースを対応させ、投与後半年以内に撮影された体幹部CT検査を抽出し、複数の放射線科医で薬剤関連大動脈炎症例の診断を行いました。その結果、本研究における大動脈炎頻度は患者あたり2.7％と既報告よりも高く、その半数以上は無症状例であることを報告しました。また、原発巣として食道がんが多いこと、フルオロウラシルやシスプラチン、ドセタキセルを含んだ化学療法が施行されている患者が多いこと、CT画像では大動脈弓とその近位分枝に好発することを報告いたしました。

これらの成果をご評価いただき、名誉ある賞を受賞させていただいたことを光栄に存じます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

受　　賞

第20回高安賞

高安賞は平成15年に、本学昭和39年卒業の臼井溢先生のご篤志により設けられた賞で、優秀な学位論文を発表した博士課程修了者に贈られる。選考は、第一次審査会（主査および副査）と専攻長等から構成される選考委員会の2段階で行われ、博士課程委員会および先進予防医学研究科会議の議を経て決定される。

令和４年度受賞者には、次の3名が選ばれた。

最優秀論文賞

盛　　金丹

腫瘍分子生物学

Treatment of retinoblastoma 1-intact hepatocellular carcinoma with cyclin-dependent kinase 4/6 inhibitor combination therapy

（RB1がん遺伝子が正常である肝細胞がんに対する合成CDK4/6阻害剤を主軸とした併用療法）

Hepatology　2021年10月掲載

優秀論文賞

鎧高　健志

細胞移植学（血液内科学）

Hematopoietic stem progenitor cells lacking HLA differ from those lacking GPI-anchored proteins in the hierarchical stage and sensitivity to immune attack in patients with acquired aplastic anemia

（再生不良性貧血患者にみられるHLA欠失造血幹/前駆細胞は分化段階と免疫学的な攻撃に対する感受性においてGPIアンカー型蛋白を欠失している細胞とは異なる）

Leukemia　2021年2月掲載

優秀論文賞

HO THUY BICH TUYEN

消化器内科学

Combination of gemcitabine and anti-PD-1 antibody enhances the anticancer effect of M1 macrophages and the Th1 response in a murine model of pancreatic cancer liver metastasis

（膵癌肝転移マウスモデルにおけるGemcitabineと抗PD-1抗体投与によるM1マクロファージとTh1応答を介する抗腫瘍効果の促進）

Journal for ImmunoTherapy of Cancer　2020年11月掲載

令和4年7月2日（土）開催の金沢大学医学部十全同窓会総会で絹谷清剛 医薬保健学総合研究科長から各受賞者に賞状と記念盾および副賞賞金が授与された。

（絹谷　清剛：記）

第18回 黒川良安賞・スロイス賞

黒川良安賞受賞

真智　耕介（令和４年卒業）
坂賀　　綾（令和４年卒業）
將積　　晃（令和４年卒業）

スロイス賞受賞

斎藤　藍子（3年次修了）
安村　大樹（3年次修了）
遠山　剛輝（3年次修了）

医学類の成績優秀学生を顕彰する黒川良安賞およびスロイス賞の授与が行われました。今回で18回目を迎えました。なお、両賞は医王保護者の会の支援を受けております。

黒川良安賞は令和３年卒業生の成績優秀者上位3名に授与されました。今回は、令和4年3月22日（火）十全講堂にて行われました学位記授与式の席上、副医学類長の谷口巧教授から黒川賞の賞状、副賞が真智耕介さん、坂賀綾さん、將積晃さんの3名に渡されました。

また、スロイス賞は、3年次を修了した学生のなかから3名が成績優秀者として受賞しました。今回は、5月28日（土）十全講堂にて医王保護者の会総会時に、土山寿志会長より斎藤藍子さん、安村大樹さん、遠山剛輝さんに賞状、副賞が渡されました。

（杉山　和久：記）

お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について、寄稿をお待ちしております。

〒921-8640　金沢市宝町13-1
金沢大学医学部十全同窓会　会報編集委員会
TEL. 076-265-2132
FAX. 076-234-4208
Email juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

学 会 報 告 等

令和4年度金沢大学十全医学会総会ならびに学術集会開催報告

日時／令和4年6月14日（火）　場所／十全講堂

6月14日（火）に金沢大学十全講堂にて、2022金沢大学十全医学会総会ならびに学術集会を開催いたしました。

本年度はコロナ感染予防を徹底した上で、対面での開催に至りました。

まず総会では、庶務担当理事の崔先生より庶務報告、会計担当理事の藤永先生から会計報告、編集担当理事の髙橋先生による編集報告が行われ、その内容が承認されました。続いて優秀論文賞をQuynh Thi Nguyenさん（当時：ウイルス感染症制御学所属）が受賞され、授与式が行われました。

続いて第18回十全医学賞を統合神経生理学前島隆司先生 研究題目「中枢概日時計及び睡眠覚醒制御回路におけるGABA作動性伝達の機能的役割の解明」が受賞され、受賞記念講演を行った。次いで、第2回十全医学奨励賞を眼科土屋俊輔先生研究題目「緑内障と概日リズム―眼圧日内変動のメカニズムを探る―」が受賞され、受賞記念講演を行いました。

本年度の学術集会のテーマは「免疫細胞療法」とし、世界トップレベルの先生方をお迎えし開催いたしました。

最初に本学幹細胞免疫制御学教授渡会浩志先生が「マウスインバリアントナチュラルキラーT細胞の胸腺内初期分化発生機構の解明～第二世代iPS-NKT細胞製剤の開発を睨んだ基礎研究～」について講演されました。次いで、京都大学医生物学研究所所長河本宏先生が「T細胞を知る、創る」、続いて、本学ナノ生命科学研究所教授華山力成先生が「改変エクソソームを用いた新規免疫制御法の開発」、最後に大阪大学栄誉教授である坂口志文先生が「制御性T細胞による免疫疾患の治療：抗原特異的免疫抑制をめざして」というテーマで講演をされました。今回の学術集会も長丁場であったにも関わらず、集会終了後も演者を囲み、質問される参加者が多く、充実した学術集会を開催できました。

本学術集会の開催に向けてご尽力いただいた十全医学会集会担当理事である華山先生、篁先生、三枝先生、山本先生、倉知先生そして関係者各位、学術集会に参加していただいた会員の皆さま方に心より感謝申し上げます。

（十全医学会会長　土屋　弘行：記）

令和4年度金沢大学十全医学会学術交流会開催報告

日時／令和4年7月2日（土）　場所／十全講堂、Web開催

令和4年7月2日（土）に金沢大学十全医学会学術交流会を開催いたしました。今年も新型コロナウイルス感染症に配慮して、昨年と同様に対面（十全講堂）とWeb参加（Zoom）によるハイブリッド型として開催し、遠隔地にいらっしゃる先生方には移動のご負担がないようにしました。今回はWeb参加者を含めて50名の参加者を得て交流会を盛会裏に終えることができました。

本交流会は、金沢大学医学系に深く関わりがあり、各地の大学や研究所などでご活躍の先生方（主に十全医学会評議員）の情報交換を目的として企画されました。加速度的に進む医学・医療の発展、少子高齢化、地域や財政（各種保険制度）の疲弊など、医学界が直面し取り組むべき問題はますます増大、複雑化しています。これらの諸問題に立ち向かい、課題先進国の我が国から新しい医学・医療を継続的に世界へ発信していくためには、何よりも時代を切り拓く優秀な医学・医療人材の養成が必要です。そして、金沢大学医学系は「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」および「北陸地域の中核的医学・医療拠点」として、世界の医学界で活躍できる医学・医療人材を育成し、送出していく大きな社会的使命を負っています。この使命を果たすためには、金沢大学医学系に縁があって、志をともにする医学・医療関係者の組織化や情報共有・交流が極めて重要と考えられます。

十全医学会会長・土屋弘行先生の開会挨拶に続き3名の先生方の講演がありました。金沢大学医薬保健研究域医学系皮膚分子病態学教授松下貴史先生から「全身性強皮症におけるB細胞の役割」についての発表があり、続いて、聖マリアンナ医科大学解剖学教授・池森敦子先生から「腎疾患診療における尿中L-FABPの有用性と可能性」について、最後に千葉大学真菌医学研究センター・進化生殖学特任教授生水真紀夫先生から「進化の視点から理解する」について、ご講演いただきました。

池森先生にはZoomを介してご講演いただき、それを日本の各地から視聴できたことには物理的な距離を乗り越える新しい学術交流の可能性を感じる一方、対面での気軽で率直な懇談ができなかったことは残念に感じられました。来年こそは対面での集会が可能になるように祈りつつ、閉会となりました。ご参加いただきました先生方ならびにご支援をいただきました十全同窓会に厚く御礼を申し上げます。

（倉知　　慎：記）

令和4年度金沢大学関連病院長会議

日時／令和4年7月2日（土）　場所／金沢大学附属病院4階宝ホール、Web開催

金沢大学関連病院長会議は一昨年（令和2年度）はコロナ禍のため、開催が中止となり、書面付議で行われました。昨年（令和3年）は6月26日（土）に県内の理事の先生方に出席していただき、その他の先生方はWebで参加という形で開催しました。本年（令和4年）は、7月2日（土）に開催され、石川県内の病院長の先生方には金沢大学附属病院の宝ホールに来ていただき対面で、富山県、福井県の院長先生方はWebでの参加となりました。会員数は令和4年度は85（富山県21、石川県47、福井県13、その他4）であり、今回新たな入会の報告はありませんでした。

会長の岡田俊英 石川県立中央病院長が開会の挨拶をされ、松下栄紀 金沢市立病院長が議長に選出され、会計理事の荒木一郎 浅ノ川総合病院長から令和3年度の事業報告、会計報告、令和4年度事業計画、令和4年度収支予算（案）が説明され、承認されました。

その後、役員の異動が報告されました。新理事に臼田和生 富山県立中央病院長、川端雅彦 富山県済生会高岡病院長が就任し、新副会長に吉川淳 福井県立病院長が就任されました。

次いで各ブロック会議から報告がなされました。富山ブロックからは、常勤医師の定年退職による常勤医師の欠員が生じ、非常勤となった診療科への常勤医師派遣の要望がありました。また、医師の働き方改革によって大学からの医師派遣が削減されないための対応や、地域医療構想に対応するために診療科の集約化・重点化が必要とのご意見がありました。福井ブロックからは、Iターン、Uターンを含め福井県に赴任希望の医師がいる場合には関連病院に連絡をしてほしいとの要望や、常勤医師の高齢化に伴う医師派遣の増員や当直医派遣の依頼がありました。石川ブロックからは、病院薬剤師が不足しており、大学病院からの支援をお願いしたいとの要望がありました。

続いて意見交換会が行われました。蒲田附属病院長からは、2年後に新中央診療棟が完成し、手術室が5部屋増えて20室になること、重症度・医療看護必要度への対応を行っていること、昨年4月から実施しているオンコール体制の評価と問題点、働き方改革への対応状況等の説明がありました。とくに、兼業医師の時間外労働を軽減する必要性から関連病院には、労基へ宿日直の届け出を積極的に行っていただきたいと要望。関連病院長からも働き方改革への対応を大学と協力してやって行きたいという意見が出されました。16時にすべて議題が終了し、閉会となりました。

（蒲田　敏文：記）

御遺骨返還式・合同慰霊祭

日時／令和4年6月18日（土）
場所／医学部十全講堂

令和4年度は、新型コロナウィルス感染症の感染拡大状況を鑑み、文部科学大臣感謝状は伝達のみとし、献体者御遺骨返還式および合同慰霊祭は、感染防止に最大限配慮して執り行いました。合同慰霊祭は、令和2年度3年度は延期としており、3年ぶりの挙行となりました。

献体者御遺骨返還式は、午前10時から、ご遺族の皆さま、しらゆり会会長井沢義武様にお越しいただき、杉山和久医学類長、医学系教職員、学生代表が出席して始まりました。名誉会員39名のご冥福を祈って黙祷をささげた後、祭主の杉山和久医学類長が、追悼のことばを述べられました。つづいて杉山和久医学類長からご遺骨がご遺族おひとりおひとりに返還されました。最後に学生を代表して平田望君（3年生代表）が感謝の言葉を申し上げ、解剖学教育と献体業務の担当代表として機能解剖学教授・尾﨑紀之がお礼の言葉を申し述べ、御遺骨返還式は終了しました。

第118回合同慰霊祭は午後1時に始まりました。祭壇には、令和元年度と令和2年度に、正常解剖と病理解剖に御体を捧げられた132名のご芳名を記した聖額が立てられ、ご遺族としらゆり会役員の皆さまのご臨席を仰ぎ、杉山和久医学類長、蒲田敏文附属病院病院長、医学系と附属病院の教職員、学生代表が参列しました。黙祷の後、杉山和久医学類長が追悼の言葉を述べられ、出席者全員が献花をしました。最後に蒲田敏文病院長が謝辞を述べられ、慰霊祭は終了しました。

7月1日（金）に、金沢大学医学部卯辰山墓地で献体者盂蘭盆会法要が営まれました。杉山和久医学類長をはじめとする医学系教職員が参列しました。覚林寺ご住職のご読経を賜り、参列者一同で献体者の冥福を祈りました。墓地法要終了後、十全同窓会が平成14年10月に修造してくださったホルトルマン（金沢医学所教師）愛児（明治9年～10年歿）の墓碑にも奉拝しました。

（尾﨑　紀之：記）

論　　説

基礎研究医養成活性化プログラムの取り組み

プロジェクトリーダー　塚　　正彦

はじめに

令和3年度に金沢大学が代表校となり採択された文部科学省基礎研究医養成活性化プログラム「医歯工法連携による次代の法医学者および地域関連人材の養成（虐プロ）」の事業について概略をご紹介いたします。

経緯

医学・医療の基盤である基礎医学研究は、医学部学生への教育や臨床への橋渡しにおいても重要な役割を果たしています。一方で、基礎医学研究においては、キャリアパスに不安を持つ方も多く、将来を担う若手医師の割合が減少しているほか、新興国の台頭により我が国の国際競争力は相対的に低下傾向にあります。また、特に病理学や法医学分野における医師が不足しているほか、平成26年6月に閣議決定された死因究明等推進計画において、死因究明等を担う人材が求められています。

基礎研究医養成活性化プログラムは、基礎医学を志す医師の減少に歯止めをかけるとともに、我が国の国際競争力を強化するため、複数の大学が連携し、キャリアパスの構築までを見据えた体系的な教育を実施する取組を支援することにより、基礎研究医の確保や基礎研究の強化を図ることを目的として公募されました。

当方の取り組み

金沢大学が提案した事業プランは、5年をかけて医歯工法および地域との連携により、児童虐待や薬物中毒、未知の感染症など臨床分野への応用を可能とする「臨床法医学」の資質を備えた基礎研究医および関連職種の人材を養成するものです。その本意は将来の基礎研究医候補である医学部学生のみならず、テーマとして与えられた児童虐待問題を正しく捉え、適切な対応が求められる、法曹3者、児童相談所職員や警察官などの関連職種の教育を並行して行うことにより、基礎研究テーマの創出と医歯学系学生のあらたな問題意識を掘り起こす点にありました。医歯工法の連携の客観的評価を当該省庁から受けるにあたり、本学の誇る「総合、融合、学際の領域に横串を刺す」気風が有利に働いたことは言うまでもありません。具体的には、令和2年に採択された文科省「先端研究基盤共用促進事業」と連携し、石川県警察本部科学捜査研究所および関連施設がもつ児童虐待や薬物中毒等に関連する情報を教育用にデータベース化し、参加大学教員および学外連携機関職員がそれらを活用することで実践的な生体鑑定模擬演習（博士課程D3）を含む法医学専門教育を行う。さらに臨床統計や関連法規、歯科法医学、検案実習などからなる法医学基礎科目（同D1-D2）、卓越大学院、工学・分析系とも連携した法医学先端研究科目（同D3-D4）をカリキュラムに加えることで、より先駆的な「臨床法医学」を実践できる人材を養成することを試み、並行して日本の大半を占める「無・歯学部県」の一つである石川県の歯学（生涯）教育の在り方を問うことも忘れません。

大学間連携は、秋田大学、金沢医科大学を連携校に、日本歯科大学を協力校に迎え、山﨑前学長（現福島国際研究教育機構理事長）から和田学長に引き継がれた臨床法医学教育拠点コンソーシアムを介したガバナンスに拠ります。事業責任者の大竹理事、堀医薬保健学総合研究科長（現域長）のご尽力、多くの教員と事務系職員のご理解とご協力に支えられて、この度無事、令和4年度春第一期生にあたる医学系大学院生1名と社会人受講生10余名を以て大学院プログラムの船出に至りました。いずれの学生・受講生も書面審査と面接を通して選ばれましたが、プログラムはこの機会を逃すまいとする気概溢れる人材で占められており、来年度以降も同程度かそれを上回る受講者数が期待されます。今後のFD活動を通して知的需要に応えながら、有用な人材を育成すべく、教育の質を高めていく所存であります。

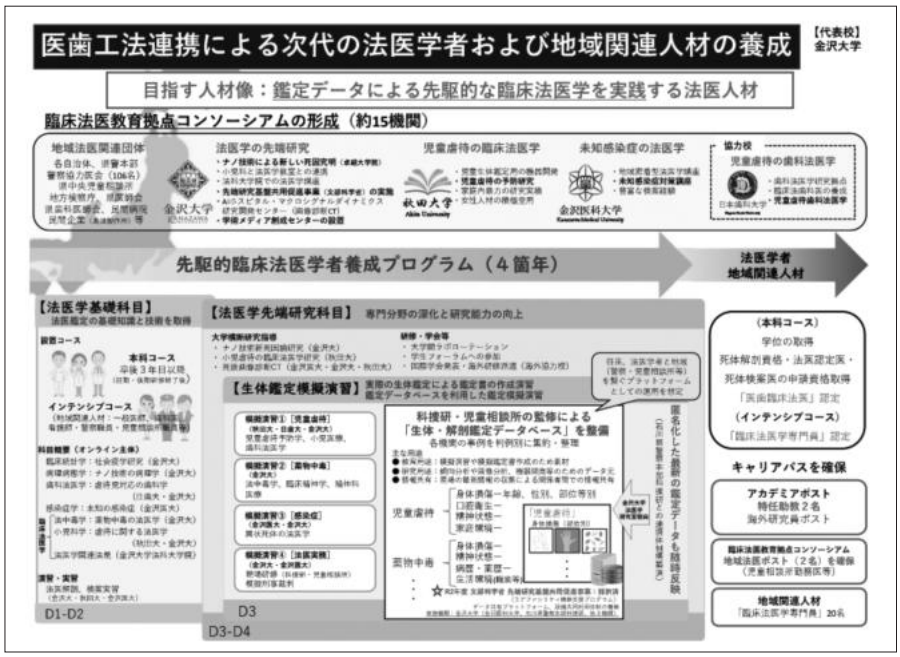
臨床法医学の概念は比較的新しく、本邦において明確な定義もありません。しかしながら、臨床医との提携なくして遂行不可能であることは明らかです。協力講座にあたる本事業コア講座を募る際、臨床系への働きかけに絹谷現医薬保健学総合研究科長のお力添えがありました。さらに、本事業の評価に関する委員就任のお願いに対して、ご快諾を賜りました十全の諸先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。

将来を見据えて

同じ形態系に属する病理学、解剖学さらに法医学の現状は、その研究および実務に携わる人数が特に少なく、現在の基礎医学研究者不足を象徴しています。我が国における児童虐待に関わる死因究明や臨床法医学の僅かな滞りが、将来人数不足による将来先進諸国からの大幅な遅れに繋がらないよう願うことと並行して、今日の基礎研究におけるマンパワー不足が負のスパイラルに陥らぬよう心がけたいものです。

QRコードから本プログラムのホームページをご参照ください。

同窓会の皆さま方におかれましては、高所から今後ともより一層のご指導とご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



金沢から世界へ発信

本学泌尿器集学的治療学の基礎・臨床研究の成果

金沢大学医学系
泌尿器集学的治療学
溝上　敦
（特別会員）

2016年夏に泌尿器集学的治療学の主任教授として就任し、もう6年経過しました。この間、患者中心、患者さんの立場に立った医療を進めるようにと、医局員には常日頃言ってきました。その中で、大学病院としては経験に基づいた医療だけではなく、しっかりとした科学的根拠に基づき、科学的な考え方を行いながら先進的な医療も患者さんに提供していくことが重要であることは言うまでもありません。科学的な考え方を養う方法として、最も有効的なやりかたは自分自身で手を動かして基礎研究をし、論文を読んで、自分自身で論文を書いて学位を取得することだと思います。学位を取得するこれらの一連の過程が極めて重要なのです。将来、大学病院内だけでなく、派遣先でも全人的な医療を患者さんに提供するためには、学位取得のための過程はきっと役立つはずだと信じていますので、医局員には原則、全員大学院生となって、基礎研究をしてもらうということをお願いしています。

基礎研究・臨床研究

私はアンドロゲン受容体（AR）と前立腺がんの再燃とに関する基礎研究を行ってきましたので、大学院生にもそれらに関する基礎研究を指導してきました。ARに関連する遺伝子やARの抗体を日本だけではなく、世界のいくつかの施設に提供をしてきました。前立腺がんの再燃に関する研究では、前立腺がんの骨転移モデルの樹立、前立腺がんの抗がん剤（タキサン系）耐性モデルの樹立を行い、これらの細胞株も日本や世界の多くの施設に提供して、共同研究を数多く行っています。当教室では、それらの細胞株を用いて多くの研究をしていますが、なかでもケモカインと前立腺がんの再燃、転移の関連などで多くの英文雑誌を発表していますし、薬学部との共同研究により非常に強力なフラボノイド系新規化合物の合成、作用機序を解明してきました。

この中で、マスコミにも注目されたのが前立腺がんに対するコーヒー成分の有効性です。コーヒーの成分は単独では効果が弱いのですが、複合することにより相乗的な効果が生まれ、抗腫瘍効果を発揮するというものです。これは欧州泌尿器科学会でも注目されましたし、米国のFOX 5のYouTubeでもトピックとして内容が放送されました。

Fox5 - coffee and prostate cancer - Mar 19, 2019 - YouTube

URL https://www.youtube.com/watch?v=guTaqKnRd_Y

また性感染症の一種であるヒトパピローマウイルス（HPV）の研究も行っています。HPVは子宮頸がんの原因ウイルスとして有名ですが、その原因は性交渉にあり、当然男性にも感染します。HPVはこれまで粘膜のスメア細胞診で診断していましたが、それを尿から検出する手法を確立したり、膀胱がんとの関連性を発見したりして、世界に発信してきました。

臨床研究においては、当科と核医学教室が中心となり、日本国内の他施設と共同で、転移性前立腺がん骨転移画像診断の前向き観察研究を行いました。その他にも進行前立腺がんに対する新規アンチアンドロゲン薬の有効性に関する前向き研究、がんセンターとの共同研究でアンドロゲン補充とがん性悪液質の改善に関わる前向き研究など多くの研究を他科と連携して行い、すべて英文雑誌に発表してきました。

臨床治験では、前立腺がんや膀胱がんに対する多くの新規治療薬の治験に携わってきており、現在でも多くの治験に関わっています。特に膀胱がんに対する新規の免疫チェックポイント阻害剤のPhase Ⅲ治験の結果はLancetに2020年に共同著者として掲載されました。

最後に

以上のような基礎研究、臨床研究、臨床治験などでこれまで泌尿器科からは毎年20本前後の英語論文を発表し、海外に向けて泌尿器科をアピールし続けています。冒頭でも書きましたが、基礎研究、臨床研究を行うことによって、患者さんの疾患を客観的に判断し、論理的な思考で病態を理解し、正しい診断、患者さんに適した治療を行うことができると思います。これらの研究成果を日本、世界に発信することで、金沢大学泌尿器科の名前を世界にますます広められるよう教室員、同窓会員一同精進したいと思います。これからも共同研究をお願いすることがあるかと思います。どうかご支援をよろしくお願いいたします。

十全学術行脚　第34回｜聖マリアンナ医科大学｜

菅生キャンパス空撮

聖マリアンナ医科大学は昭和46年（1971年）に開学した私立医科大学で、医学部医学科、看護専門学校看護科と大学院医学研究科を有する本邦唯一のキリスト教系医科大学です。大学および大学病院は神奈川県川崎市宮前区菅生、すなわち川崎市北西部に位置し、地域医療の中核を担っています。ほか、付属施設として、横浜市西部病院、東横病院、川崎市多摩病院、ブレスト＆イメージング先端医療センター附属クリニックを擁しています。上智大学、明治大学などと大学間交流と連携も行っています。今回は、金沢大学出身で聖マリアンナ医科大学ならびに関連施設で在職・勤務中のメンバーに執筆をいただきました。

2021年には開学50周年を迎え、現在菅生キャンパスリニューアル計画が進行中です。来る2023年年始にはまず新病棟がオープンします。お近くにお越しの際はぜひお声がけください。

（津川浩一郎：記）

1. 福田　護　院長

（昭和44年卒業）

附属研究所ブレスト＆イメージング先端医療センター附属クリニック

2009年、私が聖マリアンナ医科大学乳腺・内分泌外科教授を定年退職したときに、当大学附属研究所ブレスト＆イメージング先端医療センター附属クリニックが開院し、それ以来院長を務めています。当院は、日本で唯一の大学附属の独立型ブレストクリニックです。ID、電子カルテ、画像システムを大学病院と共有することにより、大学乳腺・内分泌外科（津川浩一郎主任教授）のひとつの部門として診療・教育・研究を行っています。大学所属の医師が当院外来の一部を担当し、当院の医師が大学で手術や画像診断を行っています。当院患者の緊急は、大学で乳腺・内分泌外科の医師が対応しています。当院はクリニックにも関わらず、医療福祉建築賞2010を受賞しています。中心のスタッフは、常勤（3名）と非常勤（6名）の乳腺専門医、日本臨床画像診断専門医、乳がん看護認定看護師（２人）、がん外来化学療法認定薬剤師などです。年間約400例の新規乳がんと多くの再発乳がんの治療をするとともに、乳がん凍結療法、全身拡散強調画像（DWIBS）、乳がん画像診断などの研究を行っています。

2. 津川浩一郎　主任教授

（昭和62年卒業）

外科学乳腺・内分泌外科

私は母校医学部卒業後、母校第二外科（宮崎逸夫教授）に入局し、大学院修了、関連施設での研修などを経て、1997年から母校大学病院で乳腺・内分泌外科の診療・研究を行っておりました。その後、縁あって2005年4月から聖路加国際病院ブレストセンター（乳腺外科）勤務、2010年9月から現在の聖マリアンナ医科大学外科学乳腺・内分泌外科に主任教授として勤務しております。

昭和46年（1971年）の開学当時は第一ならびに第二外科の中でそれぞれ乳腺・内分泌外科分野の診療が行われていました。その後、平成9年（1997年）に病院診療科として乳腺・内分泌外科が独立し、平成11年（1999年）に統一した外科学教室の一部門として開設されています。乳腺・内分泌外科としては同窓の福田護先生が初代教授で、私が2代目となります。

新宿からの小田急線と渋谷からの東急田園都市線にはさまれた首都圏の住宅地に立地しており、おかげさまで多くの症例に恵まれ、また複数の同窓生のスタッフにも支えられて仕事をさせていただいております。教室としては「患者さん一人一人に寄り添い、専門性の高い『愛ある医療』を提供します」をモットーに、専門性の高い診療と研究に日々励んでおります。詳細はホームページ（https://www.marianna-besurg.jp/）をご高覧いただければ幸いです。

3. 河原　太　非常勤講師

（平成4年卒業）

乳腺・内分泌外科

卒業後に旧第二外科に入局しいたしました。大学・関連病院にて諸先生方からご指導をいただきましたのち、2006年に聖マリアンナ医科大学乳腺・内分泌外科に助教として赴任いたしました。当時は十全同窓の福田護先生が教授を務めておられ、不調法な私を快く受け入れてくださいました。福田先生が退職後の2010年には金沢大第二外科の先輩である津川浩一郎先生が教授に就任され、同年に横浜に乳腺クリニックを開業した私を非常勤講師として迎えてくださいました。同教室は乳がん検診から治療、基礎研究まで乳腺領域に幅広く多大な貢献を成している教室です。手術症例数は豊富で全国屈指のハイボリュームセンターで教室員・登録医は計30名ほどが在籍しています。最近では遺伝診療部と協力しつつ遺伝カウンセリング・検査そしてリスク低減手術にも取り組んでいます。この分野では十全同門の本吉愛先生が臨床遺伝専門医を取得され活躍されております。さらにはACP、緩和医療と患者さんに寄り添った血の通った医療にも関心の高い教室です。大学病院は多くの他大学出身者が活躍し、明るく開かれた校風と感じます。

都心まで近く、さまざまな学会、研究会、勉強会に参加しやすい立地であります。本大学病院はアカデミアな方やそうでもない私のような臨床医にも門戸は広く開かれております。十全同窓の先生方の新たな参加をお待ちしております。

4. 村田　英俊　主任教授

（平成7年卒業）

脳神経外科学

私は平成7年本学医学部卒業後、横浜市立大学にて臨床研修を行い、その後同大学脳神経外科入局し研鑽を積んで参りました。2018年横浜市立大学准教授を経て、2022年4月より、聖マリアンナ医科大学脳神経外科学主任教授として着任しております。

聖マリアンナ医科大学脳神経外科は、1972年に第2外科の脳神経外科部門として発足し、1995年に脳神経外科学教室として独立、創設されました。間もなく創設30周年を迎え、私で4代目の教授となります。川崎市・横浜市北部（人口約250万人）の脳神経外科医療の中心的役割を担っています。私はこれまで、脳血管外科、脳腫瘍外科（頭蓋底外科）、脊髄外科を3本柱として臨床研鑽を重ねてきましたが、当大学では、新生児から高齢者まで、生命に関わる疾患（くも膜下出血や脳腫瘍等）から生活の質を高める治療（てんかんや不随意運動の治療）まで全領域のエキスパートを擁し、全ての脳神経外科疾患の専門治療を行っています。

当地域は東京と横浜に隣接した場所柄、多くの医療・医育機関がひしめいております。こうした強い臨床基盤を確立することは、患者さんにとって有益であるだけでなく、医師の人材確保、人材育成にとっても大きな役割を果たすと考えています。当教室では圧倒的に強い臨床の充実を目標に、明るく、健康的な教室創りを目指しています。

5. 池森　敦子（旧姓：上條）　主任教授

（平成7年卒業）

解剖学（機能組織）

卒業後、東京大学医学部付属病院等で内科および腎臓内科の研修を受け、1998年に東京大学大学院医学系研究科（木村健二郎講師）に入学しました。腎臓における尿中L型脂肪酸結合蛋白（L-FABP）の有用性について基礎的および臨床的に研究を行い、2002年に学位（博士―医学）を取得しました。その後、聖マリアンナ医科大学腎臓高血圧内科の助手となりましたが、研究に専念するため、2005年解剖学（機能組織）の教員になり、現在に至ります。

本学の解剖学講座は、人体構造、機能組織、生物学の3分野からなり、細胞、組織、肉眼解剖と非常に幅広い分野の教育・研究を行っております。私は、機能組織分野に所属し、教育は、組織学を担当しております。研究は、「腎臓病の克服」を目指し、さまざまな角度から腎臓病の進行因子や治療ターゲット分子の同定を行っております。単科大学のため、講座間の垣根が低く、様々な職種の方々と広く共同研究を行うことができます。最近は、本学のご近所にある明治大学の先生方と腎臓微小循環評価システムの構築のため、動物での評価を行いました。

今後も教育・研究に一層精進してまいる所存です。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

6. 本吉　　愛　助教授

（平成9年卒業）

外科学（乳腺・内分泌外科）

卒業後、金沢大学旧第2外科学講座に入局し、大学病院および関連施設では多くの先生方からご指導を受け消化器一般外科医として研鑽を積みました。家庭の事情により医局を離れた後、がん研究会附属病院（現がん研有明病院）で乳がん診療について研修を受け、平成18年からは乳腺外科を専門とし、八尾総合病院（現富山西病院）にて江嵐充治先生に師事し、当時は保険適用前であったインプラントを用いた乳房再建や高周波熱凝固療法などの先進技術を学びました。平成27年に同門の津川浩一郎教授にお誘いただき聖マリアンナ医科大学に赴任し現在に至ります。赴任後は、医師を志した頃より興味のあった遺伝医療についても学ばせていただき臨床遺伝専門医を取得、現在は遺伝診療部も兼任しております。近年、がん診療においては包括的がんゲノムプロファイリング検査やコンパニオン診断としての生殖細胞系列遺伝学的検査などゲノムを扱う検査が急速に普及しており、お役に立てるよう尽力しています。

支部だより

愛知支部

令和4年6月26日（日）に、第36回金沢大学十全同窓会愛知支部総会を名鉄グランドホテルにおいて開催しました。今回は、５年に一度開催されます金沢大学東海支部全学部同窓会（第3回）の前に別室に参集して愛知支部総会を開催しました。

コロナ禍が落ち着きを取り戻し始めてきた時期となり、19名の参加でした。加えて、本学東海支部全学部同窓会に合わせて、本学からは、和田隆志学長（昭和63年卒業）ならびに大竹茂樹副学長（昭和52年卒業）、三重支部から原田資先生（昭和46年卒業）、岐阜支部から大西弘生先生（昭和51年卒業）・渡辺幸夫先生（昭和56年卒業）・髙橋健先生（昭和57年卒業）をお迎えして、開催することができました。

まず、昭和23年ご卒業の服部義明先生の訃報に接し、ご冥福を祈り黙祷を捧げました。次に、宮本幸彦先生（昭和56年卒業）の令和3年秋の叙勲瑞宝双光章受勲に祝意を表しました。

その後、支部長の篠田雅幸先生（昭和51年卒業）のご挨拶に続き、和田学長、大竹副学長よりご挨拶を賜りました。和田学長からは、附属病院のナンバー科廃止で内科・外科ともに再編がなされたこと、最新設備手術室を含めた新たな中央診療棟の建設が始まったことなどが紹介されました。同窓会担当の理事でもある大竹副学長からは、コロナ禍で全く各地の同窓会活動との連携が途絶えていたことを踏まえ、今後の積極的な活動再開への意欲が述べられました。

続いて、篠田支部長から会計報告、前支部長の水上哲秀先生（昭和47年卒業）からその監査報告を受け、承認を行いました。通常は、特別講演にて学びの時を持ちますが、今回は全学部同窓会への出席のため、出席者一同で記念写真を撮って愛知支部総会は終了とし、東海支部全学部同窓会へと移りました。

今回の出席者は、平成元年以降の卒業生が8名（42％）といつもより若い方の参加が多かったことを、幹事として喜ばしく感じています。今後とも、幅広い年代の同窓生が一同に会し、金沢大学医学部卒のアイデンティティを確かめる良い機会が設けられるよう、幹事として努めてまいります。

（高味　良行［平成元年卒業］：記）

病院紹介

公立宇出津総合病院

沿革と概要

当院は、旧能都町と旧柳田村による一部事務組合により内科・外科・小児科・産婦人科・耳鼻咽喉科、病床数90床で昭和27年に開院しました。平成3年に改築、病床数は180床となり、平成17年3月の町村合併によって能登町立の病院となりました。平成21年には病床数120床となり、平成27年には地域包括ケア病床を開設、平成31年からは100床（急性期病床80床・地域包括ケア病床20床）で運営しています。

現在の診療科数は17科、病棟の看護体系は10対1、透析ベッド数は18台にて運営しています。

当院の現状

開設当初から地域の総合的な病院としての役割を担いつつ、都市圏から遠く離れていても、可能な限り格差の無い医療の提供が当院の使命と考え医療の提供に努めています。当院および当医療圏（能登北部）で対応していない重篤な患者さんや専門的な治療を要する患者さんについては能登中部医療圏や石川中央医療圏の3次救急医療機関と緊密に連携を取って対応しています。

回復期医療および慢性期医療については地域包括ケア病床や医療サービス推進室、近隣の医療機関や介護施設との連携を取ることで対応しています。

臨床研修

初診や救急外来を担当することで、初期対応に必要な知識と技術を学ぶことができます。初診から入院となった患者を指導医と担当し指導・点検を受けることで、より理解を深めることができます。

訪問診療、診療所の外来、都市部の基幹病院への紹介事例を経験することで、地域の特性や地域における病院の役割を知ることができます。

寮と食事を準備しています。職員一同が地域での貴重な経験をお手伝いします。

今後の展望

能登町の人口は減少の局面にあり、高齢者の人口も減少し始めています。高齢化率は50％を超え、2025年頃まで急上昇しその後緩やかに上昇すると予測されています。当院の患者さんの９割は町民であることから能登町の人口が大幅に減少し始める2025年以降は入院患者の減少も加速し、2040年には現在の3分の2程度まで減少する見込みです。

その中で近隣の医療機関や介護施設との連携を取りつつ訪問診療や訪問看護を継続し、地域医療の基幹病院として医療・保健・福祉の総合的なサービスと格差のない医療の提供の継続を目指し、その役割を担いたいと考えています。

（院長　長谷川　啓：記）

概要

公立宇出津総合病院

所在地	石川県鳳珠郡 能登町字宇出津夕字97番地
病院長	長谷川　啓
病床数	100床（一般病床）
診療科数	17

沿革

昭和21年10月	日本医療団宇出津病院として開設
昭和27年 6月	宇出津地区総合病院組合立宇出津病院発足
昭和42年 1月	能都町、柳田村病院組合結成、同組合に移管
昭和53年 7月	宇出津地区病院組合公立宇出津総合病院に名称変更
平成 3年 3月	改築工事完成
平成17年 3月	3町村（能都町、柳田村、内浦町）合併により公立宇出津総合病院に名称変更

厚生連滑川病院

当院の歩み

厚生連滑川病院（正式名称：富山県厚生農業協同組合連合会滑川病院）は終戦直前の昭和20年7月に富山県農業会第2病院として開設され、昭和50年4月に現病院名に改称された歴史ある病院で、ホタルイカで有名な富山県滑川市にある病床数279床の公的病院です。当院は富山湾近くの海沿いに位置し、病院の北側には日本海を、南側には立山連峰を望むことができ、病院からの眺望は北陸随一ではと思っております。また病院の中庭には孝徳泉という湧き水があります。これは今から400年余前に、巡礼中の親子の父親が滑川で病に倒れ、これを助けるため息子が延命の水として有名な清水寺の音羽の水を求め京都まで走り、持ち帰ったもののすでに遅く父親は他界しており、その墓に音羽の水をかけたところ水が湧き出し、これが孝徳泉と名付けられたと伝えられています。毎年、京都清水寺の森清範貫主が当院の孝徳泉に法要に来られています。

診療

当院は人口約33,000人の滑川市唯一の総合病院であり、市民病院的な性格を有し、地域住民に信頼されるアットホームな病院を理念に掲げ、市医師会、行政とも協力し、地域の中核病院としてふさわしい医療水準を提供できるよう、職員一同、日夜努力しております。現在、急性期3病棟、地域包括ケア1病棟、精神科1病棟の5病棟で運営しております。当院の常勤医師は23名と少ないのですが、それゆえ医局内の風通しもよく、他科との連携も良好で、中小規模の病院の利点を生かした小回りのきいた診療を行っております。急性期から回復期まで一人一人の患者さんをシームレスに診療できることが当院の特色であり、地域医療の中核病院としての役割を担っています。また健康管理センターも併設しており、年間約7,000人の地域住民の健康管理を行っており、予防医療にも力を入れています。

今後の展望

私ども厚生連滑川病院は令和5年度から、精神科病棟を閉棟し、急性期2病棟、地域包括ケア2病棟の199床の病院として新たなスタートをきる予定です。今まで以上に地域の皆さまにより密着した、急性期から回復期、在宅治療まで、地域医療の中核病院としての責任を果たしていくべく、職員一同全力を尽くしていく所存です。私どものような地方の中小病院では医師不足が深刻な問題となっております。私どもの病院を取り巻く環境は年々厳しさを増してきております。十全同窓会の皆さまのご支援なしでは私ども厚生連滑川病院の将来はありません。今後とも変わらぬ十全同窓会の皆さま のご支援を、どうかよろしくお願いいたします。

（院長　小栗　　光：記）

概要

富山県厚生農業協同組合連合会滑川病院

所在地	富山県滑川市常盤町119番地
開　設	昭和20年7月10日
病院長	小栗　　光
病床数	279床（一般211床／精神68床）
診療科数	15

沿革

昭和20年7月	富山県農業会第2病院開設
昭和23年8月	富山県文化厚生農業協同組合連合会滑川病院に改称
昭和26年4月	農協滑川病院に改称
昭和50年4月	富山県厚生農業協同組合連合会滑川病院に改称（厚生連滑川病院）

教室だより

衛生学・公衆衛生学

教育

二教室の統合に伴い、従来の講義および実習の構成について見直しが行われ、効率化されました。具体的には、2020年度入学生まで適用される3年の「衛生学（講義）」と「公衆衛生学I（講義）」が2021年度入学生より「衛生・公衆衛生学I」として再編成され、「衛生学（実習）」と「公衆衛生学I（実習）」は、「衛生・公衆衛生学Ⅰ（実習）」で進めることとなりました。また、国および地域における最新の健康・医療政策等を学ぶ6年生の「公衆衛生学II」は、「衛生・公衆衛生学II」として継続していくこととしています。もう一つ、前回寄稿時以降に開始された「病態生理・基本的基礎配属」において実習する3年生に対する新しい教育活動として、先進予防医学研究科のグローバルヘルス実習と連動したWHOをはじめとする国際機関への訪問・研修があります。コロナ禍で一時中止の年が続いていますが、ポストコロナ・ウィズコロナ時代にあった内容での再開が期待されます。

卒後教育では、多くの教室の先生方のご協力のもと、修士課程の「環境と健康」、博士課程の「環境と健康総論」および「環境・遺伝要因と健康総論」を担当しています。関連学会の教育活動とリンクするものとして、「予防医学概論」があります。これは日本予防医学会に創設された「予防医学指導士」を認定するためのカリキュラムとなっています。

疫学研究と地域連携事業

超高齢化少子社会の医療・健康・介護・福祉のさまざまな問題の克服を目指して、2011（平成23）年３月に教室と石川県志賀町との間で健康づくりに関する連携協定が結ばれました。2016（平成28）年4月には、本学大学院先進予防医学研究科と志賀町での協定に拡張されています。2013年度より実施中の「スーパー予防医学検診」では、附属病院の多くの科からも協力を得て、最先端の検査法を導入しています。事業で得られたデータは大学での研究にも生かすとともに、調査結果をふまえた住民への説明会および健康セミナー、個人結果に関する情報提供に利用しています。本事業の後半では、検診の対象をこれまでのモデル地区４つから全町に拡大し、住民の健康増進に資する活動をさらに推進していきたいと思っています。

大気汚染物質とアレルギー疾患

黄砂や微小粒子状物質（$PM_{2.5}$）をはじめとした大気汚染物質と喘息などの免疫・アレルギー疾患の発症・増悪との関連性について明らかにし、その予防法を開発することを目的とした環境疫学研究に取り組んでいます。最近では、人種や地域を超え、学内外および海外のラボとの共同研究を行っています。また、$PM_{2.5}$の成分である多環芳香族炭化水素類（PAH）に注目し、国内複数地点におけるPAHのモニタリングを通して、越境大気汚染やアレルギー症状に与える影響についても調査を進めています。

個別の研究テーマ

自己免疫性原発性アルドステロン症の自己抗体の探索、ガンビアの自動車産業における労働安全衛生マネジメントシステム向上を目指した調査研究などの個別テーマにも取り組んでいます。

おわりに

末筆になりましたが、教室員一同、教育、研究、地域・社会貢献を行い、予防医学を通した教室の発展に向けて努力する所存ですので、十全同窓会の先生方には、今後ともご指導の程、何とぞよろしくお願い申し上げます。

（原　　章規：記）

スタッフ　※2022（令和4）年8月現在

中村裕之教授、出村准教授、原准教授、東助教、辻口特任助教、鈴木博士研究員、高澤研究員、中村研究員、藤田事務補佐員、葛城技能補佐員、毛利技能補佐員、杉原技術補佐員、そして大学院生21名［博士課程16名（うち留学生1名）、修士課程5名（うち留学生3名）］で構成されています。

研究分野の沿革

平成26年5月に発行された第157号の「教室だより」に寄稿させていただいて以降、教室の沿革に大きな転機がありました。2021（令和3）年度にありました衛生学教室との統合です。これにより、教室名は衛生学・公衆衛生学に変更となりました。

歯科口腔外科学

診療

当教室は1946年（昭和21年）5月に診療科として院内設置され、名称は附属病院歯科治療室でした。全国の医学部附属病院の中でも早い時期に設置され、今年で76年になりました。その後、北陸では歯学部が設立されなかったため、当教室は北陸地区の歯科口腔外科の中心的な存在になっています。歯科口腔外科は、口腔、顎、顔面ならびにその隣接組織の疾患を扱う診療科です。歯科疾患では虫歯や歯周病、歯や顎骨・顔面の外傷や感染症、顎関節疾患、唾液腺疾患、受け口などの顎変形症、口唇口蓋裂などの先天性疾患、口腔粘膜疾患、神経性疾患、良性腫瘍や口腔がんなど様々な疾患を扱っています。

当科では特に院内や近隣の病院からの紹介患者さんや開業医院、歯科医院からの紹介患者さんが多くを占め、初診患者さんは年間3000人以上になります。また院内の患者さんの口腔ケア、摂食・嚥下など、他科と連携した治療も行っています。

教育

医学類では「歯科口腔外科学」として臨床講義や臨床実習を3年生から6年生まで担当しています。医者として必要な歯科疾患、口腔疾患について講義を行っています。特に、全身疾患と口腔との関連について講義し、口腔は誤嚥性肺炎などの呼吸器疾患、循環器疾患、糖尿病、早産・低体重出生や関節リウマチなど全身のさまざまな疾病と深く関わっていることを教育しています。また、口腔は食べ物の咀嚼だけでなく、発音や嚥下などの機能に関わっていて、健康において重要な器官であることを教育しています。

研究分野科目として「細胞浸潤学特論」を担当しています。毎週木曜日に、最新の口腔外科、再生医学、歯科医学に関する論文を解説する抄読会を行い、討論を通して大学院生の教育を行っています。さらに、各大学院生に応じた指導、教育を行い、年に1回各専門分野の優れた内外の研究者を招待し、研究に関する討論の機会を提供し大学院生の研究への動機付けを行っています。

先に述べたように北陸では歯学部がないため、卒後歯科医師の臨床研修医教育や口腔外科認定医・専門医取得のための研修も行っています。当科は症例が豊富で様々な疾患の患者さんの診療をしているので、多くの歯科医師が在籍しています。

研究

教室の従来からの研究課題である口腔がん、顎関節症および顎変形症に加え、再生医療や歯科インプラントの研究を行っています。

口腔がんでは口腔扁平上皮がんの浸潤様式細分類を基盤として「癌の浸潤と転移の機序に関する臨床病理学的、免疫組織化学的ならびに実験的研究」を20年余にわたり系統的に行い、translational research として国内外に誇り得る多くの成果を挙げることができました。また最近では各種薬剤や免疫抑制剤の浸潤転移抑制効果を検討し良好な成果を得ています。

顎関節症の患者は社会的なストレスの増加や食生活の変化に伴い増加傾向にあります。しかしながら、病態の解明がほとんど進んでいないので、当教室では顎関節症実験動物モデルの開発し、顎関節症の発症機序の解明を目指しています。

顎変形症は、顎顔面頭蓋の成長発育異常による上下顎の骨格の不調和に、歯の位置の異常が加わることにより、咬み合わせの重度の異常と顎骨の変形を呈する疾患です。顎矯正手術後においては著しい腫脹や開口障害が出現し、気道管理が最も重要な周術期管理の一つです。そこで当教室においては、顎変形症患者の周術期における気道通気状態と睡眠呼吸障害の解明と顎変形症の周術期管理、手術の安全性に関する研究を行っています。これからも臨床を見据えた研究をさらに発展させていきたいと考えています。

おわりに

歯科口腔外科は医科と歯科をつなぐ連携を担っている教室だと思います。当教室は金沢大学の多くの臨床講座と基礎講座の協力で成り立っています。関連の先生方に感謝したいと思います。なお、十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

スタッフ

教　授　　川尻　秀一
准教授　　加藤　広禄
講　師（医局長）　大井　一浩
助　教　　伊藤　達郎、宮澤　広樹
医員4名、大学院生10名、歯科臨床研修医3名、技能補佐員1名、歯科衛生士2名、歯科技工士1名

研究分野の沿革

1946年に初代科長として湯本実が就任する。1960年2代科長として石田勝一が東京大学口腔外科より着任する。1965年に岡伸光が岐阜県立医科大学より3代科長として着任する。1973年に玉井健三が4代科長として就任し1977年に講座に昇格、初代教授となる。1988年、山本悦秀が2代教授として着任する。2011年に川尻秀一が3代教授に就任し、今日に至っている。

金沢大学医学生と「生と死」を考える：麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告（その5）

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科（緩和ケアセンター）
山田　圭輔

写真：医学生と緩和ケアチームスタッフ
矢島（麻酔科蘇生科）、筆者、竹中、閑、常木、佐伯（専門看護師）、中野（麻酔科蘇生科）

筆者が担当する医学類5年生の緩和医療臨床実習では、「これまでに人の生と死を考えさせられ、深く共感した書籍、映画、芸術、自分の経験などを1つ選び、人は苦境の中をいかに生きることができるのかに関する自分の考えを皆に紹介しなさい」との課題を与え、レポートにまとめさせてきた。

この課題を考える時には、死を避けることができないものとして受け入れ、その中で人はどのように生きられるか、医療者はどのような支援ができるかについて自身の言葉で表現できるとよいと伝えている。本稿では令和3年度5年生3名（常木颯、竹中亮太、閑隆太朗）のレポートを紹介する（写真）。

1）徒然草（吉田兼好）

徒然草の第93段「人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々に楽しまざらんや」と、第155段「死期は序を待たず。人皆死ある事を知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来る」を紹介した。武士の世である鎌倉時代を生き、無常を体感した吉田兼好は、徒然草の中で先述の如く「生と死」を表現した。生とは、死と常に隣り合わせの事象であり、何の前触れもなく訪れる。しかし多くの人は死を他人事として捉え、今ある命を懸命に生きているようには感じられない。もし命に限りがあること、その終期を知ったならば、更に今を生きる喜びを感じられるのだろう。

迫りくる死と対峙する患者に対して、医療者ができることは何か。それは、「生きていることへの喜びや尊さを感じてもらうこと」「死について共に考えること」である。患者に寄り添い、患者の目線で物事を捉え、今ある生を輝かせることが大切であると感じた。また、アドバンス・ケア・プランニング（ACP）を通じて、死や命の終わりについて話し合うことも重要である。医療者は、死と密接にかかわる存在であるからこそ、患者それぞれの生を輝かせることのできる存在であると思う。

2）大切なこと

（松下幸之助 文、江村信一 絵、PHP研究所）

私の祖母は、昨年1月に脳出血をきたした。私は、人のために生きるという信念のもと金沢大学医学部に入学したが、祖母が倒れたという連絡を受け、身近な大切な人の力になれない自分の無力さや不甲斐なさを感じた。今年1月に10分だけ祖母と面会する機会が設けられ、祖母は「先生から聞くより、亮太の言葉の方が信じられる」と声をかけてくれた。こんな自分でも少なからず祖母の助けになっていると思えた。

ふと、幼い頃に祖母からもらった松下幸之助の「大切なこと」の一節「自分のものがあると思っていても、それは仮にそう定められているだけのことであって、ほんとうは何もないのである。授かったものである」を思い出した。祖母は突然に普通の生活を奪われた。しかし、祖母の意思によって普通の生活がそこにあったわけではない。普通の生活は、授かったものであって、大切にするべきものだったのだ。私自身も、自分の力のなさを嘆くより、自分という存在をもっと大切にすることの方が、人を幸せにすることができるのだと気がついた。人の存在を、大切に慎重にそして有意義に、生きることを支えていくことが医療者の支援のスタンスなのだと考えた。

3）ハイリゲンシュタットの遺書

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770-1827）は幼い頃から音楽の才能を示し、当初はピアニストとして高く評価された音楽家であった。しかし20代後半から、音楽家の命ともいえる耳が聴こえなくなってしまう。そのような辛い状況の中で書かれたのがハイリゲンシュタットの遺書である。その中には「自分の生命を絶つまでほんの少しの所であった。私を引き留めたのはただ芸術だけであった」と記されている。これはピアニストの道を捨て、作曲専業の道へと進み、新しい自分として再出発する決意書だったのである。

彼には5歳年上の幼馴染の医師フランツ・ヴェルハルト・ヴェーゲラー（1765-1848）がおり、彼が最初に耳の異常を打ち明け、その後も頼りにしたのはヴェーゲラーだったとされている。ヴェーゲラーにとって友人の病気を治すことができなかったのはさぞ無念だっただろうが、ヴェーゲラーの存在があったからこそ、彼は自殺を思いとどまり、新たな道に進む決意ができたのである。

ヴェーゲラーのように話を聴き、患者が悩んだり決意するところを見守り支援することも、医療者の重要な仕事だと考えた。ヴェーゲラーの支援と、自身の芸術への強い情熱をもってベートーヴェンは苦境を乗り越え、彼が遺した作品は今なお多くの人々に聴き継がれているのである。

金沢大学医学生と「生と死」を考える（アーカイブス：2013年度5年生J班）

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科（緩和ケアセンター）
山田　圭輔

金沢大学医学生と「生と死」を考える実習は2009年度から開始し、2011年度からは全員のレポートを報告集（金沢大学医学生と「生と死」を考える）として編集してきた。筆者は金大病院緩和ケアチームで長く勤務しているが、時々に死の虚しさに襲われてしまう。そんな時に、これまでの医学生のレポートから再生する力をもらい、患者さんや家族の支援、多職種および地域連携にも応用させてもらっている。

2013年度5年生の実習は、「絶望に効く薬：希望の言葉（ライム）を紹介しなさい」とのサブタイトルを付けて実施した。絶望に効く薬は人の中にあり、人を救うのは人であるとの考えです。本稿では当時J班だった釜蓋明輝先生（現・富山病院小児科）、木村亮堅先生（現・小松市民病院脳神経外科）、小林知博先生（現・金大病院放射線科）のレポートを紹介する（写真）。

写真：J班実習時の記念写真（2013年9月）
後列：小林、小川、木村、筆者　前列：釜蓋、毛利、宮本

1）死ぬことじゃないわ、生きることを怖がっている

映画ゲド戦記（スタジオジブリ）から抜粋しました。黒幕に囚われてしまったアレンを助けに来たテルーの言葉です。「違う、死ぬことが分かっているから命は大切なんだ。アレンが怖がっているのは死ぬことじゃない、生きることを怖がっている。死んでもいいとか、永遠に死にたくないとか。そんなのどっちも同じだわ。一つしかない命を生きるのが怖いだけよ」

生きている人間が誰一人として経験したことがない自身の死は、最大の恐怖です。私にとっても死は忌み嫌う対象で、考えるだけでもひどい恐怖に駆られてしまいます。しかしこの言葉が、自分の死生観を変えました。生と死は表裏一体であり、死の拒絶はすなわち生の拒絶であるということ、死があるからこそ生が大切だと語る言葉は、私の心に深く突き刺ささりました。同時に、未成年者の自殺や、殺人でさえも蔓延する今の時代に、この言葉をもって一石を投じたいとも考えました。

2）死に方は選べないが生き方は自由だろ

空知英秋のデビュー漫画「だんでらいおん」作中の言葉です。おじいさんが、50年連れ添ったおばあさんと喧嘩したまま死別したことを悔やみ、仲直りしたいと願って地縛霊となります。喧嘩の理由は「彼女が楽しみに冷やしてあったプリンを食べてしまった」というつまらないものでしたが、霊を成仏させる仕事をしている主人公たちの努力で二人は再会します。

おじいさんが謝ろうとした時、おばあさんは「バカかいあんた」とおじいさんを諌めて、「死に方は選べないが生き方は自由だろ。笑って死ぬことはできなくても、私らさんざん笑って生きてきたじゃないか、それ以上何を望むんだい」と伝えます。これを聞いておじいさんは成仏していきます。

私の中でも、これらの言葉は強く印象に残りました。どのような最期であっても、それまで生きてきた人生は変わりません。死に方は誰も選べないからこそ、楽しい生き方を選べたのならそれで良いのです。当時中学生だった私は、感動と同時に衝撃を受けたのを覚えています。

3）人間だもの

相田みつをの「人間だもの」という言葉が、真っ先に思い付いた。人間は誰しも、それぞれが考える「理想の自分」を持ち、その理想に近づけるよう努力する。しかし、理想を追い求めたにも関わらず、少しも近づいている気がしないという状況に陥ることが多々ある。その時に何もかも諦めてしまう人もいるだろうが、そんな状況であっても生きて努力を続けるための糧となる言葉が「人間だもの」である。

この言葉は詩の一節であり、その前の節「つまずいたっていいじゃないか」という言葉に続いて書かれている。これは、人間誰しも壁に当たることは当たり前であり、挫折はその人ひとりだけが味わうものではないという意味である。壁にぶつかった時、この言葉を思い出せば、「自分には無理だった、諦めよう」と考えるのではなく、「生きるうえで挫折するのは当たり前、また頑張ろう」と考えることができる。「人間だもの」という言葉は、壁にぶつかっているという状況そのものを受容して、その中でも生きる努力を続ける希望を与えてくれる言葉だと思う。

第16回金沢大学ホームカミングデイ開催

今回で16回目となる、「金沢大学ホームカミングデイ」を10月29日（土）に開催いたします。今年も、午前中にキャンパス見学会を計画しました。

金沢大学ホームカミングデイ当日は、角間キャンパスにて「第59回金大祭」（10月29日（土）～10月30日（日））の開催期間中であり、さらにキャンパス内では各種催しや展示等を自由にご覧いただけます。また、金沢城公園では写真展「あのころの金沢大学」を開催いたします。

歓迎式典、特別講演および懇親交流会（参加費無料）は、新型コロナウイルス感染症への感染防止対策を徹底したうえで実施いたします。ウイズコロナを見据えて、3年ぶりの角間キャンパスの紅葉をお楽しみいただきながらご参加いただけるよう、企画しております。

ご家族や同期生、サークル仲間のみなさまとご一緒に、紅葉の金沢へどうぞお越しください。学友支援室ホームページに、開催情報を掲載しています。

◎参加費：無料
◎申込み締切：9月23日（金）
◎申込み・プログラム等の詳細は下記へお尋ねください。

【金沢大学学友支援室】
TEL 076−264−5081
FAX 076−234−4033
メール　gakuyu@adm.kanazawa-u.ac.jp

同窓生の演奏で盛り上がる懇親会の様子

昨年の第15回ホームカミングデイの様子
（合唱団による校歌斉唱）

寄附制度のご案内（金沢大学医学教育研究支援寄附金）

近年、国立大学法人の改革強化・促進が国の施策として急速に進められる中、医学類・医学系においても、実施すべき事業が次々と生じております。本来ならば、これらの事柄は大学の予算により実施すべきところですが、昨今、本学の財政状況は逼迫しており、部局に対して十分な予算措置が行われない状況です。

医学類・医学系としては、自助努力の方策を模索せざるを得ず、その一環として、平成26年９月に本学類・系が行う教育・研究に役立てることを目的とした≪金沢大学医学教育研究支援寄附金≫を起ち上げ、支援事業を推進して参りました。

本学の医学教育研究のさらなる充実発展のため、同窓会会員の方々におかれましては、今後とも格別の御支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

金沢大学　医薬保健学域医学類長
医薬保健研究域医学系長
杉山　和久

【担当（お問い合わせ先）】

〒920-8640　金沢市宝町13-1　医学類Ｂ棟1F
金沢大学医薬保健系事務部会計課経理係
Tel：076-265-2115
E-mail：t-keiri@adm.kanazawa-u.ac.jp

【お申込方法について】

・　電子メール又は電話でのお申込み
　上記担当まで電子メール又は電話にてご連絡ください。折り返し、申込書を送付させていただきます。
　現金のお持ち込みにより、ご寄附いただくこともできますが、その場合も上記方法によりあらかじめご連絡いただけますと幸いです。

【税法上の控除について】

・　寄附者が個人の場合は、所得税法上の控除対象となる寄附金として、確定申告の際、所得から控除され、税法上の優遇措置を受けることができます。また、石川県内在住者の寄附は、石川県や県内市町村からの個人住民税の控除を受けることができます。（※所得税法、地方税法ともに２千円を超える寄附額から控除対象となります。）
・　寄附者が法人の場合は、法人税法上の全額損金算入が認められる寄附金として、法人の所得から控除でき、税法上の優遇措置を受けることができます。

会費納入のお願い

同窓会事業は皆様からの会費により支えられています。
会費納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

会費納入方法をお知らせいたします。

①自動引き落とし（手数料本会負担）

本年度より取り扱いを開始いたします。お手続き希望の方はご連絡先を事務局宛にお知らせください。
折返し「銀行口座自動振替手続きの書類」をお送りいたします。
是非この機会にご検討くださいます様お願いいたします。

②払込用紙（手数料本会負担）

従来通り同封の「払込取扱票」をご利用ください。

③銀行ネット決済（ネットバンキング）

下記銀行口座へ直接お振り込みが可能です。
（お振込の際は、**ご氏名の前に会員番号のご入力**をお願いいたします）

北陸銀行　小立野支店
普通預金　６０５１０４７　金沢大学医学部十全同窓会 会費口

問合せ先

金沢大学医学部十全同窓会事務局
TEL：０７６－２６５－２１３２　FAX：０７６－２３４－４２０８　Email：juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

金大病院コロナ基金へのご支援のお願い

附属病院長
蒲田　敏文

十全同窓会会員の皆様へ

当院は2020年4月より新型コロナ感染症の患者を受け入れ、50名を超える重症患者に対し人工呼吸器やECMO等による集中治療を行ってきました。写真にあるように40名を超えるスタッフからなるCOVSAT（Covid Special Assistant Team）の献身的な治療により、多くの重症患者は感染症を克服し、元気に歩いて自宅に戻ることができました。

今後も金沢大学病院は職員一丸となって、新型コロナ感染症患者の治療に頑張ってまいります。同窓会の皆様には、当院へのご支援のほど宜しくお願い致します。すでにご支援いただいた同窓会員様には、心より感謝申し上げます。

（COVSATによる腹臥位療法）

■お申込方法

金沢大学附属病院 新型コロナウイルス感染症対策基金
金沢大学附属病院ウェブサイト内の専用ページにて、お手続き願います。
https://web.hosp.kanazawa-u.ac.jp/oshirase/2020covid19_kifu.html

▼お申込みフォームへ

金大病院コロナ基金　検索

■お問い合わせ先

金沢大学 病院部 経営管理課 予算企画係　電話：076-265-2066（直通）　E-mail：hpyosan@adm.kanazawa-u.ac.jp

連絡先の変更・ご異動の際は、
金沢大学医学部十全同窓会会員情報変更サイトをご活用ください

URL　http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member

会員情報変更はこちら

ご不明な点は下記事務局へご連絡ください。

TEL：076-265-2132
Email：juzen-ob@med.kanazawa-u.ac.jp

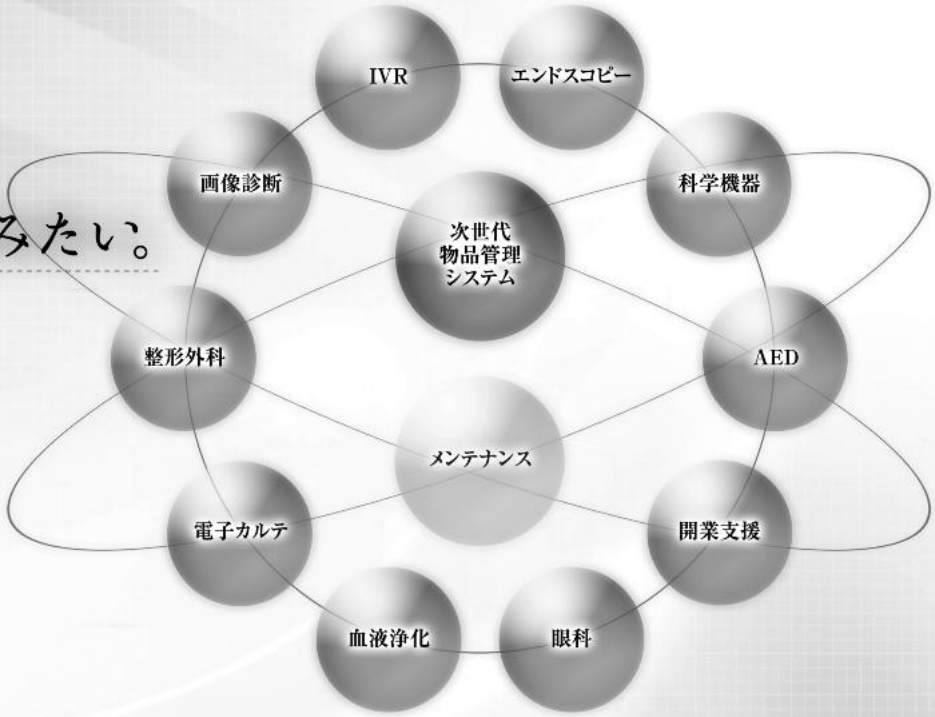
ホテル日航金沢

城下町・金沢を彩る"舞台"という発想のホテルです。
地上30階、高さ130mは北陸随一のスケールを誇り、多彩で充実した施設と
きめ細やかなおもてなしで皆様をお迎えいたします。

一期一縁のおもてなし。

〒920-0853 石川県金沢市本町2-15-1(JR金沢駅兼六園口前)
Tel：076-234-1111　Fax：076-234-8802
ホテル日航金沢 検索 www.hnkanazawa.jp

医療とともに
大きな夢を育みたい。



冨木医療器株式会社
http://www.tomiki.co.jp

本社　〒920-8539 金沢市問屋町2-46　TEL(076)237-5555(代)　FAX(076)237-6584
支店　金沢・富山・福井　　営業所　七尾・高岡

SAVING YOU TIME
WHILE YOU SAVE
LIVES.

That's Intelligently Efficient.

大切な時間、命を守るために。

GEヘルスケアでは、テクノロジーが医療従事者の皆様のより良いパートナーとして機能するよう、そのインテリジェンスに着目して開発を進めています。
革新的な製品やデータ分析・ソフトウェアサービスを通じて、予防から診断、治療、予後の管理まで効果的にサポートし、患者さんが求める医療を提供できるよう最善を尽くします。
詳しくは、gehealthcare.co.jpをご覧ください。

JB03484JA

十全同窓会団体保険「会員総合補償制度」導入のご連絡

十全同窓会会員の皆様へ

十全同窓会員のための福祉厚生策といたしまして「会員総合補償制度」を立ち上げることにいたしましたのでお知らせいたします。

① 本制度は、任意加入の団体損害保険契約であり、初年度は勤務医師賠償責任保険及び所得補償保険など医師の先生方に必要性の高い保険を団体割引を適用しご加入しやすい月払い保険料方式で募集いたします。

② 団体保険の開始日（保険始期日）は、2023 年 9 月 1 日となります。

③ 引受保険会社は、全国の医学部同窓会契約に最も精通している東京海上日動火災保険㈱としております。

募集の保険内容は次号会報（2023 年 1 月発行）にてお知らせいたします。

金沢大学医学部十全同窓会
会長　　山本　健

【取扱代理店】株式会社パイオニア　【引受保険会社】東京海上日動火災保険株式会社

いついかなる時も、
いちばんそばに。

安心と安全で、社会を支える。
それが1879年から変わらない、私たちの約束です。
万が一に遭った時の「いざ」はもちろん、
新しく挑戦する時の「いざ」まで、「いついかなる時も」頼りになりたい。
目指すのは、お客さまを最もよく知り、「いちばんそばに」寄り添う存在です。
だからこそ私たちは、もっと一人ひとりに向き合います。
人とデジタルの力を合わせ、リスクの対応だけでなく、リスクの予測・
予防を通じて、「いついかなる時も」お役に立ち続けます。
リスクを知り尽くしたプロフェッショナルとして、
人生のあらゆる「いざ」を支える存在へ。
いついかなる時も、いちばんそばに。
東京海上日動の新しい決意です。

To Be a Good Company
TOKIO MARINE NICHIDO 東京海上日動

会報編集委員の紹介

学内編集委員（14名）

蒲田　敏文
中村　裕之
横山　　茂（副編集委員長）
絹谷　清剛（編集委員長）
佐々木素子
篁　　俊成
和田　隆志
杉本　直俊
谷口　　巧
山本　靖彦
中田　光俊
倉知　　慎
毎田　佳子
濱口　儒人

学外編集委員（21名）

山口　成良
佐藤　　保
三輪　晃一
橋本　琢磨
中村　信一
勝田　省吾
山本　　健
山本　　博
山岸　正和
太田　哲生
大村　健二
横山　　仁
大島　　徹
横山　　修
中本　安成
高村　博之
常山　幸一
古川　健治
古市　賢吾
若山　友彦
中西　清香

以上35名で構成されています。

表紙の写真

医学図書館中庭

医学図書館2階自習室から眺める中庭。奥には解剖標本庫があります。手前の楷（カイ）の木は、「学問の木」「大器晩成の木」と呼ばれ、2013年の金沢大学創基150年記念事業ではキャンパス内に植樹が行われました。

題字：山本　　健（十全同窓会会長）

発行：金沢大学医学部十全同窓会
会報編集委員会
〒920-8640　金沢市宝町 13-1
http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp

発行日：令和 4 年 10 月 4 日

印　刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

同窓会事業は皆さまからの会費により支えられています。
十全医学会とは別組織であることをご理解ください。

編集後記

十全同窓会会報182号の校了を目前にし、ご寄稿を賜った文章の誤字・脱字をチェックするとともに、この拙文を書いています。自分は残暑でバテ気味ですが、底引き網が解禁となるこの時期、近江町市場を通り抜け魚を眺めることをささやかな楽しみとしています。今年はさほど豊漁でもないとの声を耳にしますが、それでもほのかに脂の乗りはじめたフクラギの造りなどを堪能しています。ひと頃は激減していた観光客も増えてきて、週末には短いながらも行列のできている寿司屋やおでん屋を見かけるようになりました。このまま新型コロナウイルス感染症が完全な終息に向かうことを願うばかりです。

本号では、同窓会関連の行事が昨年度・一昨年度に比べて活発になったことが随所に見て取れます。オンライン配信が思いのほか便利であり、充分享受してきましたが、四方山話に浸るのが好きな自分にはやや物足りなくも感じられます。今後は対面とWeb開催のハイブリッド形式が主流になり続けるのでしょうが、対面形式での情報交換・懇親会が復活することも期待しております。

末筆になりますが、同窓会の皆さまのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

（横山　　茂：記）